64-242
1200501278089
+
+2

始

ヨ 4F-95

64-242

岩倉具視關係文書

第六

昭和六・三・八 帝國圖書館藏

64-242

岩倉具視關係文書　第六

目次

明治七年

一　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年三月五日　一頁
二　木戸孝允書翰「岩倉具視宛」　明治七年三月五日　二
三　岩倉具視・三條實美書翰「大久保利通宛」　明治七年三月七日　三
四　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治七年三月十三日　五
五　岩倉具視書翰「調所廣丈宛」　明治七年三月十三日　七
六　岩倉具視書翰「三條實美宛」　明治七年三月十四日　八
七　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年三月十六日　九
八　三宮義胤書翰「岩倉具視宛」　明治七年三月十九日　一一

宮内庁書陵部

九　松平慶永書翰　「岩倉具視宛」　明治七年三月廿五日　一三
一〇　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年三月廿六日　一五
一一　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年三月廿八日　一六
一二　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年三月廿八日　一九
一三　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年三月廿八日　二一
一四　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年三月廿八日　二二
一五　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年三月廿八日　二三
一六　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治八年三月三十日　二四
一七　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年三月三十日　二五
一八　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年三月三十日　二五
一九　三條實美・岩倉具視書翰　「大山巖宛」　明治七年三月　二六
二〇　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年四月一日　二七
二一　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月八日　二九

二二　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月九日　三〇
二三　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月九日　三一
二四　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年四月十二日　三二
二五　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年四月十二日　三三
二六　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月十二日　三六
二七　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年四月十三日　三七
二八　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年四月十三日　三七
二九　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月十三日　三八
三〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月十三日　三九
三一　黑田清隆書翰　「三條實美・岩倉具視宛」　明治七年四月十三日　四〇
三二　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月十五日　四一
三三　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年四月十五日　四二
三四　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年四月十五日　四三

三五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月十八日　四四
三六　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年四月十八日　四四
三七　松平慶永・伊達宗城書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月十八日　四五
三八　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月十八日　四六
三九　海江田信義書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月十八日　四七
四〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月十九日　四八
四一　佐々木高行書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月十九日　四九
四二　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月二十日　五一
四三　伊達宗城書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月二十日　五一
四四　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年四月二十日　五二
四五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月廿一日　五二
四六　島津珍彦書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月廿一日　五三
四七　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月廿一日　五四
四八　德大寺實則書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月廿二日　五六
四九　黑田清隆書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月廿二日　五七
五〇　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治七年四月廿三日　五七
參考　島津久光書翰　「三條實美宛」　明治七年四月廿四日
五一　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月廿三日　六一
五二　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月廿四日　六二
五三　黑田清隆書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月廿四日　六三
五四　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月廿五日　六四
五五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月廿五日　六四
五六　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年四月廿五日　六五
五七　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月廿六日　六六
五八　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月廿六日　六七
五九　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月廿七日　六七

六〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月廿七日　六八
六一　土方久元書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月廿八日　六八
六二　佐々木高行書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月廿八日　六九
六三　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年四月廿八日　七一
六四　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治七年四月廿九日　七一
六五　華族會館創設に關する協賛書　「中御門經之宛」　明治七年四月　七三
參考　伊藤博文書翰　「三條實美宛」　明治七年四月廿三日
六六　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年五月一日　七七
六七　佐々木高行書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月二日　七八
六八　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治七年五月八日　七九
六九　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月八日　八〇
七〇　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月九日　八二
七一　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年五月十日　八二
七二　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月十一日　八三
七三　大木喬任書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月十二日　八四
七四　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月十三日　八五
七五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月十五日　八六
七六　岩倉具視書翰　「花房義實宛」　明治七年五月十五日　八七
七七　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月十六日　八九
七八　原保太郎書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月十七日　九〇
七九　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年五月十八日　九六
八〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月十九日　九七
八一　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年五月二十日　九八
八二　三宮義胤書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月二十日　九八
八三　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月廿二日　一〇四
八四　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月廿二日　一〇五

八五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月廿二日　一〇五
八六　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年五月廿二日　一〇六
八七　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月廿三日　一〇七
八八　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月廿三日　一〇七
八九　島津久光書翰　「三條實美・岩倉具視宛」　明治七年五月廿三日　一〇八
九〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月廿三日　一〇九
九一　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月廿三日　一一〇
九二　島津久光書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月廿三日　一一一
九三　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月廿四日　一一一
九四　島津久光書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月廿四日　一一二
九五　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年五月廿四日　一一三
九六　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年五月廿四日　一一三
九七　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月廿五日　一一四

九八　岩倉具視書翰　「島津久光宛」　明治七年五月廿五日　一一五
九九　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年五月廿五日　一一六
一〇〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月廿六日　一一七
一〇一　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月廿七日　一一八
一〇二　岩倉具視書翰案　「島津久光宛」　明治七年五月廿七日　一一八
一〇三　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月廿八日　一一九
一〇四　伊藤博文書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月廿九日　一一九
一〇五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月三十日　一二一
一〇六　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治七年五月三十日　一二二
一〇七　大木喬任書翰　「岩倉具視宛」　明治七年五月三十一日　一二三
一〇八　岩倉具視書翰　「三條實美・島津久光宛」　明治七年五月　一二五
一〇九　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月一日　一二六
一一〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月一日　一二六

一一一　大木喬任書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月一日　一二七
一一二　大木喬任書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月一日　一二八
一一三　大木喬任書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月二日　一二九
一一四　小河一敏書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月二日　一三二
一一五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月三日　一三五
一一六　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年六月三日　一三六
一一七　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年六月四日　一三六
一一八　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月六日　一三八
一一九　伊藤博文書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月六日　一三八
一二〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月六日　一三九
一二一　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月六日　一四〇
一二二　岩倉具視書翰　「高崎正風宛」　明治七年六月六日　一四一
一二三　伊藤博文書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月七日　一四一

一二四　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月八日　一四二
一二五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月九日　一四三
一二六　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月九日　一四四
一二七　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月十日　一四四
一二八　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月十三日　一四五
一二九　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年六月十四日　一四六
一三〇　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年六月十四日　一四七
一三一　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年六月十五日　一四七
一三二　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月二十日　一五二
一三三　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月廿四日　一五二
一三四　島津久光書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月廿四日　一五三
一三五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月廿五日　一五四
一三六　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月廿八日　一五四

一三七　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年六月廿八日　一五五
一三八　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年六月三十日　一五六
一三九　大隈重信書翰　「三條實美・岩倉具視宛」　明治七年六月　一五七
一四〇　大隈重信書翰　「三條實美・岩倉具視宛」　明治七年六月　一五八
一四一　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月二日　一六〇
一四二　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月五日　一六一
一四三　大原重徳書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月五日　一六一
一四四　大原重徳建白書　「岩倉具視宛」　明治七年七月五日　一六二
一四五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月七日　一六四
一四六　奈良原繁書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月七日　一六五
一四七　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月八日　一六六
一四八　松平慶永書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月九日　一六七
一四九　岩倉具視書翰　「北白川宮能久親王宛」　明治七年七月十三日　一六八

一五〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月十六日　一六九
一五一　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月十六日　一七〇
一五二　岩倉具視書翰　「柳原前光宛」　明治七年七月十六日　一七〇
一五三　勝安芳書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月十六日　一七二
一五四　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月十七日　一七三
一五五　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年七月十七日　一七四
一五六　佐々木高行書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月十七日　一七五
一五七　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月十八日　一七六
一五八　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年七月十八日　一七七
一五九　中山忠能書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月廿一日　一七七
一六〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月廿二日　一七八
一六一　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年七月廿三日　一七九
一六二　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月廿四日　一八〇

一六三　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月廿四日　一八一
一六四　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月廿六日　一八二
一六五　岩倉具視書翰　「島津久光宛」　明治七年七月廿六日　一八三
一六六　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月廿七日　一八五
一六七　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年七月三十一日　一八六
一六八　伊藤博文書翰　「岩倉具視宛」　明治七年八月一日　一八六
一六九　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年八月四日　一八七
一七〇　岩倉具視書翰　「柳原前光宛」　明治七年八月五日　一八八
一七一　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年八月八日　一九〇
一七二　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年八月十二日　一九一
一七三　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年八月十四日　一九二
一七四　伊藤博文書翰　「岩倉具視宛」　明治七年八月十六日　一九三

参考　臺灣蕃地處分の儀に付趣意書　明治七年八月

一七五　大木喬任書翰　「岩倉具視宛」　明治七年八月十七日　二〇〇
一七六　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年八月廿三日　二〇一
一七七　島津久光書翰　「岩倉具視宛」　明治七年八月廿三日　二〇二
一七八　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治七年八月廿三日　二〇三
一七九　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年八月廿四日　二〇四
一八〇　中山忠能等建白書　「三條實美・岩倉具視宛」　明治七年八月廿四日　二〇四
一八一　岩倉具視書翰　「松平慶永宛」　明治七年八月廿四日　二〇七
一八二　嵯峨實愛書翰　「岩倉具視宛」　明治七年八月廿四日　二〇八
一八三　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治七年八月廿五日　二〇九
一八四　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年八月廿六日　二一一
一八五　岩倉具視書翰　「三條實美・島津久光宛」　明治七年八月廿六日　二一一
一八六　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年八月廿七日　二一五
一八七　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年八月廿七日　二一六

一八八　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年八月廿九日　二一七
一八九　海江田信義書翰　「岩倉具視宛」　明治七年八月三十日　二一八
一九〇　岩倉具視書翰　「伊藤博文宛」　明治七年九月二日　二一九
一九一　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年九月七日　二二一
一九二　寺島宗則書翰　「岩倉具視宛」　明治七年九月九日　二二二
一九三　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年九月十二日　二二三
一九四　海江田信義口上書　「岩倉具視宛」　明治七年九月十六日　二二三
一九五　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治七年九月廿四日　二二四
一九六　木戸孝允書翰　「岩倉具視宛」　明治七年九月廿四日　二二五
一九七　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治七年九月廿五日　二二六
一九八　中御門經之建白書　「岩倉具視宛」　明治七年九月　二二八
一九九　嵯峨實愛書翰　「岩倉具視宛」　明治七年十月一日　二三一
二〇〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年十月七日　二三二
二〇一　岩倉具視書翰案　「大久保利通宛」　明治七年十月十五日　二三四
二〇二　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年十月十五日　二三五
二〇三　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年十月十七日　二三七
二〇四　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年十月廿一日　二三七
二〇五　內史書翰　「岩倉具視宛」　明治七年十月廿八日　二三八
二〇六　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治七年十一月二日　二三九
二〇七　島津久光書翰　「岩倉具視宛」　明治七年十一月八日　二四一
二〇八　岩倉具視書翰　「德大寺實則宛」　明治七年十一月十二日　二四二
二〇九　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年十一月十二日　二四三
二一〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年十一月二十日　二四五
二一一　岩倉具視書翰　「上野景範宛」　明治七年十一月廿三日　二四五
二一二　岩倉具視書翰　「榎本武揚宛」　明治七年十一月　二四七
二一三　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治七年十二月十一日　二四八

二一四　岩倉具視書翰案　「槇村正直宛」　明治七年十二月十四日　二五〇
二一五　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治七年十二月廿八日　二五一
二一六　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年十二月廿九日　二五二
二一七　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治七年　二五三
二一八　岩倉具視書翰　「西郷從道宛」　明治七年　二五四
二一九　岩倉具視書翰　「青木周藏宛」　明治七年　二五五
二二〇　岩倉具視意見書　明治七年　二五六
二二一　岩倉具視建白書　明治七年　二六二

明治八年

一　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年一月十六日　二六五
二　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年一月三十一日　二六六
三　槇村正直報告書　「岩倉具視宛」　明治八年二月三日　二六七
四　岩倉具視書翰　「黑田清綱宛」　明治八年二月十日　二六八
五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年二月十一日　二六九
六　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年二月廿三日　二七〇
七　安場保和書翰　「岩倉具視宛」　明治八年三月三日　二七一
八　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年三月十五日　二七三
九　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年三月十八日　二七四
一〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年三月三十一日　二七八
一一　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治八年三月三十一日　二七九
一二　佐々木高行書翰　「岩倉具視宛」　明治八年三月三十一日　二八〇

参考　佐々木高行書翰案　「岩倉具視宛」　明治八年三月廿九日

一三　岩倉具視書建白書　明治八年三月　二八五
一四　黑田清隆書翰　「岩倉具視宛」　明治八年四月十三日　二八六
一五　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治八年四月十四日　二八九

一六　德大寺實則書翰　「岩倉具視宛」　明治八年四月十四日　二九〇
一七　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年四月十五日　二九一
一八　佐々木高行書翰　「岩倉具視宛」　明治八年四月廿二日　二九二
一九　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治八年四月廿二日　二九四
二〇　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治八年五月一日　二九五
二一　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治八年五月一日　二九五
二二　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年五月二日　二九六
二三　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治八年五月四日　三〇八
二四　三宮義胤書翰　「岩倉具視宛」　明治八年五月四日　三一一
二五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年五月五日　三一四
二六　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治八年五月六日　三一五
二七　小河一敏書翰　「岩倉具視宛」　明治八年五月十二日　三一六
二八　伊藤博文書翰　「岩倉具視宛」　明治八年五月十九日　三一七

二九　青木周藏書翰　「岩倉具視宛」　明治八年五月二十日　三一八
三〇　小河一敏上書　「岩倉具視宛」　明治八年五月廿一日　三二〇
三一　岩倉具視書翰　「上野景範宛」　明治八年五月廿二日　三二二
三二　朝彥親王御書翰　「岩倉具視宛」　明治八年五月廿七日　三二五
三三　小河一敏書翰　「岩倉具視宛」　明治八年五月三十一日　三二五
三四　青木周藏書翰　「三條實美・岩倉具視宛」　明治八年六月二日　三二七
三五　岩倉具視書翰　「朝彥親王宛」　明治八年六月六日　三三〇
三六　岩倉具視書翰　「久我建通宛」　明治八年六月七日　三三〇
三七　香川敬三書翰　「岩倉具視宛」　明治八年六月七日　三三一
三八　花房義質書翰　「岩倉具視宛」　明治八年六月十五日　三三三
三九　三宮義胤書翰　「岩倉具視宛」　明治八年六月十六日　三三五
參考　青木周藏書翰　「三宮義胤宛」　明治八年六月十六日　三三八
四〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年六月廿五日　三三九

四一　三宮義胤書翰　「岩倉具視宛」　明治八年七月一日　三四一
四二　上野景範書翰　「岩倉具視宛」　明治八年七月十日　三四四
四三　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年七月十四日　三四五
四四　青木周藏書翰　「岩倉具視宛」　明治八年七月十五日　三四六
四五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年七月十五日　三四九
四六　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治八年七月十九日　三五〇
四七　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治八年七月二十日　三五一
四八　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治八年七月二十日　三五二
四九　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治八年七月廿一日　三五三
五〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年七月廿四日　三五四
五一　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年七月廿五日　三五五
五二　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年七月廿九日　三五六
五三　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年七月三十日　三五六

五四　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年七月三十一日　三五八
五五　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治八年七月三十一日　三五八
五六　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年八月二日　三五九
五七　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年八月十五日　三五九
五八　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治八年八月三十日　三六〇
五九　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治八年九月三日　三六一
六〇　寺島宗則書翰　「岩倉具視宛」　明治八年九月四日　三六二
六一　岩倉具視書翰　「三宮義胤宛」　明治八年九月五日　三六三
六二　岩倉具視書翰　「青木周藏宛」　明治八年九月五日　三六五
六三　岩倉具視書翰　「花房義質宛」　明治八年九月五日　三六八
六四　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年九月十八日　三六九
六五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年九月廿七日　三七〇
六六　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年九月廿七日　三七一

六七　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年九月廿九日　三七二
六八　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治八年九月三十日　三七二
六九　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治八年九月三十日　三七三
七〇　内田政風口上書　「岩倉具視宛」　明治八年九月三十日　三七五
参考　島津左大臣へ協議の始末概略　明治八年十月　三七五
同　内田示談書類　明治八年十月　三八〇
同　島津久光上書　三八三
七一　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月一日　三九一
七二　岩倉具視書翰　「德大寺實則・柳原前光宛」　明治八年十月二日　三九二
七三　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月二日　三九四
七四　伊藤博文書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月二日　三九六
七五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月四日　三九七
七六　德大寺實則書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月四日　三九八

七七　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治八年十月四日　三九九
七八　内田政風書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月五日　三九九
七九　内田政風書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月七日　四〇〇
八〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月十二日　四〇一
八一　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月二十日　四〇一
八二　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治八年十月二十日　四〇三
八三　海江田信義書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月二十日　四〇三
八四　德大寺實則書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月廿一日　四〇四
八五　德大寺實則書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月廿一日　四〇五
参考　岩倉具視手記　明治八年十月　四〇五
八六　德大寺實則書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月廿二日　四一三
八七　島津久光書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月廿二日　四一四
八八　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月廿三日　四一六

八九　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月廿三日　四一八
九〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月廿四日　四二〇
九一　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月廿四日　四二〇
九二　島津久光書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月廿四日　四二一
九三　岩倉具視書翰　「島津久光宛」　明治八年十月廿四日　四二三
九四　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治八年十月廿七日　四二四
九五　佐々木高行書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月廿七日　四二四
九六　島津久光書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月廿八日　四二五
九七　奈良原繁建言書　「岩倉具視宛」　明治八年十月　四二七
九八　大久保利通書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十月三十日　四二八
參考　海江田信義・内田政風建言書　明治八年十月三十日
九九　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十一月一日　四三四
一〇〇　中山忠能書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十一月七日　四三五

一〇一　佐々木高行書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十一月七日　四三六
參考　清水源藏書翰　「佐々木高行宛」　明治八年十一月上旬
一〇二　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治八年十一月七日　四三八
一〇三　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十一月十日　四三九
一〇四　佐々木高行書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十一月廿三日　四四〇
一〇五　黑田清隆書翰　「三條實美宛」　明治八年十一月廿七日　四四一
一〇六　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十一月廿八日　四四二
一〇七　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十一月廿八日　四四二
一〇八　鮫島尙信書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十一月廿九日　四四三
一〇九　三條實美・岩倉具視書翰　「壬生基修宛」　明治八年十一月　四四四
一一〇　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治八年十二月二日　四四五
一一一　鮫島尙信書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十二月六日　四四五
一一二　黑田清隆書翰　「三條實美・岩倉具視宛」　明治八年十二月十六日　四四六

一一三　岩倉具視書翰　「島津久光宛」　明治七年十二月廿六日　四四七
一一四　黑田清隆書翰　「岩倉具視宛」　明治八年十二月廿八日　四四七
一一五　岩倉具視書翰案　「青木周蔵宛」　明治八年　四四八
一一六　岩倉具視書翰　「榎本武揚宛」　明治八年　四五〇
一一七　岩倉具視書翰　「原保太郎宛」　明治八年　四五二
一一八　岩倉具視書翰　「三宮義胤宛」　明治八年　四五二
一一九　岩倉具視書翰　「蜂須賀茵部宛」　明治八年　四五三
一二〇　岩倉具視書翰　「本野盛亨宛」　明治八年　四五四

明治九年

一　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治九年一月廿六日　四五七
二　岩倉具視書翰　「香川敬三宛」　明治九年四月十一日　四五八
三　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治九年五月十五日　四五八

四　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治九年七月十一日　四五九
五　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治九年八月十五日　四六一
六　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治九年八月二十日　四六二
七　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治九年九月廿八日　四六三
八　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治九年十月十三日　四六五
九　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治九年十月十六日　四六五
一〇　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治九年十月廿五日　四六六
一一　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治九年十月廿九日　四六七
一二　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治九年十月廿九日　四六七
一三　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治九年十一月四日　四六八
一四　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治九年十一月十日　四六九
一五　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治九年十一月十日　四七〇
一六　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治九年十一月廿七日　四七〇

一七　岩倉具視書翰「池田慶徳等宛」明治九年　三十　四七二

目次終り

岩倉具視關係文書　第六

明治七年

一　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」明治七年三月五日

昨夕は御苦勞其砌拜密書則令返入候扨兼て御舊縣一件云々萬御引請御配慮被下候事と曾て安念罷在候附ては今後の處何か厚く御談合申度昨夕も早々の御咄合のみに付一兩日中一夕緩々御談し申度尚從當方時日可申入と存候條御苦勞被下度存候備前宇都宮云々定て御聞と存候へ共別紙電報入御一覽候此者へ御返し可給候也

三　五

佐々木殿　　具視

二　木戸孝允書翰「岩倉具視宛」　明治七年三月五日

拜呈過刻御廻しに候別紙拜見仕候如御沙汰大小尉其外兵卒に至るまて戰死疵瘡實に可憐ゑ至に御座候乍去別に御侍醫にゐも被差遣候と申御儀は如何可有之哉軍隊ゑものは國家非常ゑ其難に當り候者至當ゑ儀にゐ此度筑前其外ゑ士兼ゐ軍隊中ゑものにゐも無之候處各國家ゑ艱難を救わんと格別憂國ゑ志を奮ひ戰死或は受瘡候もの等も可有之是等は如何可被遊哉惣ゐ可成丈け公平に無之ゐは後害不少付ゐは決ゐ容易御侍醫等被差向候は如何可有之哉と奉存候其上如此度は眞ゑ一小戰にゐ後來また如何ゑ大戰可有之も難計朝廷ゑ御仕向は始に厚く終に薄き等ゑ弊相生し候ゐも却ゐ將來ゑ御爲不宜と御高慮を被爲盡候ゐ御所致可然と奉存候

○嵯峨御家來甲谷ゐ內々御惠ゑ邊は別に愚存申上儀も無御座過日御渡被仰付候書類只今何樣詮議仕候ゐも鳥渡見當り不申其內精々詮議可仕候間小々御了簡奉願上候先は御答ゐ申上度恐々頓首拜復

三月五日　　木戸孝允

亂筆高恕

岩倉公閣下

三　岩倉具視・三條實美書翰「大久保利通宛」　明治七年三月七日

天氣平穩百官各勉勵奉職府下も靜謐候條御放慮可被成候貴卿にも彌御安全御勵精欣然ゑ至に候然は賊徒も意外速に平定被奏其功候事天下ゑ幸甚何事か之にしかん最初目的とは賊勢强大御辛苦ゑ程如何計りと千萬令察候度々ゑ電信屆けり去る五日江藤始め巨魁十名逃去ゑ報迄正に令承知候右等何卒片時も早く捕縛有之度嘸々御配慮と推計り候貴卿野津等ゑ書翰各一度つゝ落手令一見候扨過日高島下向ゑ砌傳言

且呈書申入候通りにゐ其後替り候事も無之同人着後直に同人差返しか亦別人にゐも御差登しか御心配被下候樣申入置候儀定ゐ御取計被下候事と御待申居候將亦明日便船より（黒田へ内談人體未た不其分相候）一人差立候義は他事にも無之其平定に至り大事粗御指揮ゑ上は跡々民政上其外大綱御下知置にて一日も速に御歸府ゑ事偏に令渇望候右は當形勢より非常人心不穩不相變浮説も有之候に付貴卿一度御引上け相成候はゝ衆庶大に可令安堵候且内實は政府上も多事萬端殊更に一段御大切ゑ場合深く苦慮候次第も有之旁兩人限りにゐ此段別て申入候事に候何分根軸大事にゐ申迄も無之候得共貴卿の如き一日も不可欠事故吳々厚く御賢考早々御引上けの事御承知被下度存候黒田へは萬談し申候事に候仍如此候也

三月七日　　具視
實美

大久保内務卿殿

且申候凡何日頃御發途可相成哉一筆御答可被下候以上

四　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治七年三月十三日

當月二日正院一同ゐ御書狀外に日記凡て令一見候
聖上益々御安泰府下も追々靜謐御放慮候樣存候貴卿にも彌御清榮大憤發御勵精ゑ趣追々傳承爲國家恭悅此上に候在百官何れも無事に候間御安心可給候
一過日來狀ゑ砌は阿部十郎面會承候而已ゑ處午後米田士出會幷二日出貴書一見追々情實分明候寔に遙察よりは現場意外の賊勢其盛大吳々御苦辛ゑ程早々萬々令推察候御憤發ゑ力と將官死力を盡し候とに有之則速に平定ゑ事にゐ實に感佩爲
朝廷恭悅此事に存候猶得と始末殊更に御多事と令遠察候傳承には人民

一同官軍奉戴不一方との事にゐ至仁ゑ　思召も始て鎮西に分明候事と存候

一正院一同過日御答書懇々陳述ゑ筈には候得とも猶將官の勞不一方能々御傳聲可給候

一調所廣丈別飛脚差立申入候通り差掛りケ樣ゑ義有之御歸府御座なくては不叶と申には無之候得共前後熟考候に如何にも不容易御時節と遠慮候件々有之是非々々片時も早く御歸ゑ事令熟企候

一米田話には久光卿西郷出會至極都合ゑ事と傳承とも坂本始め五六名此比出府の話にゐは色々傳聞候乍去近々奈良原外兩三名千里丸より歸府の趣是にゐ萬事可相分と存候鹿兒島素り異情は無之由何れの御咄も同樣の事に承候

一肥後國情大田黑士に承候處一時は餘程危殆ゑ處先々平定の由併谷士の力多きにありと近日同人臺灣行如何に存候事に候

一明十四日出帆にゐ大藏省七等出仕河元某下向ゑ旨に付此一書令進入候小生偏に望む處は御歸府片時を爭ひ御待申候事に候近情ゑ處は定ゐ黑田士より被申入候事と存候に付只々一筆而已

右早々如此候也

三月十三日　　具視

大久保內務卿殿

島始七名大山手にゐ捕縛ゑ由先以安心候何卒江東も早く御手に入候樣祈候

五　岩倉具視書翰「調所廣丈宛」明治七年三月十三日

去る六日更に內務卿ゐの書狀一通傳達ゑ義申入候處右御答七日午後到來既に御發足後と存候に付不及御答事に候然は此度大久保卿迄爲內使下向

之義申入候處速に奉命殊に船便云々に付斷然決意自八日夜白陸路兼行神戸にゟ乗船寸時を爭ひ佐賀縣迄下着之趣不一方奮發一段之都合にゟ欣然此事に候明十四日出帆にゟ大藏省七等出仕河元某發途便過日返事旁一書差進し候或は歸路中行違候も難計候仍ゟ早々如此候也

三月十三日　岩倉具視

調所廣丈殿

六　岩倉具視書翰「三條實美宛」明治七年三月十四日

先時御書中之所來人中不能御答恐入存候扨臺灣殖民云々之事勿論御同意然る所午後大隈拙宅へ入來に付幸甚此事と存し尚又臺灣吾屬地殖民等は不容易事共云々隨ゟは昨日伊藤内々申出候木戸氏百方苦慮内意之次第都ゟ打明申入實に以大事此事に存候先日も御委任狀之砌兩人異存申入之砌屬地殖民等之事は今度成功之上實地巨細取調之上凡ゟ伺出政府大に御評議有之而して可相決ものと申入候末西郷には小生ゟ得と云々申入置候段は卽足下承知之通りに候右故足下長崎行は當然不都合に存候得とも前條云々重大事件に付更に西郷大輔に得と御打合不取戻相成樣の義出來せぬ樣應談之事急務に付旁衆說之通り當月中歸東之事に候はゝ崎行も承知致候と右申置候間明朝之所は尊公思召丈にゟ御招寄御一人にゟ御申聞之樣願存候

先時大隈暫時崎行之事申出候尚尊公へ御談申入三木中にも可申談申聞候

右は尊公ゟ御噂之所何とも異存無御座勝にも大隈一應參り候方可然申候由に候

七年三月十四日

七　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」明治七年三月十六日

今朝御投書忝く令一見候懇々來示の條御尤に候
一漢文建白松下綱武田舍の事情書取云々何も承候如命牧民の義は當今要務實に政府民情を顧ずんば不可有義に付幸其事情篤と承度存候に付明朝十時同人へ御傳入來相成候樣御取計有之度若し差支候はゞ更に日限可申入尤五六日中に歸國の義は承知致候
一舊縣地模樣搜索一紙內々一見深く忝存候情誼分明大に心得に相成欣然此事に候尙此上篤く御注意有之度存候事に御座候則一紙御返し申候
一過日御出の節御談申入候刀劍云々の事尙厚く御賢考大木とも御內談被下候事と存候

右御請迄如此候也

三月十六日　　具視

佐々木高行殿

八　三宮義胤書翰「岩倉具視宛」　明治七年三月十九日

近日龍公子ゟ御送りゟ御直書を得拜讀欣喜手足の措處を不知御金瘡追々御平癒御模樣實に何より以難有事に御座候唯御身の上御爲め計りに非ず皇國の大幸に御座候實に御一新前後屢大難を被爲凌候事は幾千度なれとも實に此度の如く御身自ら白刃の間に危難を御凌き被爲遊候事は實に前后に無之事に御座候天地の間未た老公の御運不盡萬死を御遁れ被遊候事唯々夢の心地仕候計に御座候乍然し我々遠方に絶居し御案し申上候樣にも無之速に御快復誠に喜ひの上の喜ひ龍公子始一同安心仕候原保太郎も蜂氏の恩庇に依り一七日前當地へ着仕候當地は野老と同居仕居候同人も餘程御身上の事御案し申居候處御直筆幷に旭公子の御帖を拜見大に安心仕候是に付ゟは唯々日本政府の大難に居し候事を案勞仕候事に御座候先頃肥前の蜂起の說當地にて甚高く日本政府の――借金の事――直段九十本度以

下迄下落仕り候然し此節にては百五本度計迄直上り致し申候先達てより
歴々たる參議免職に相成候末百事御大義實に廟堂上の事眼の當り聞見す
る心地にて唯老公の御苦勞を想像仕り候計に御座候龍公子も續て御勉學
決て御心配無之樣希上候何歟出來仕候共蜂公萬事引請て龍公子を助け殊
に近來原保太郎も當地滯留總て以往龍公子の御一身上に就ては皆々熟談
を遂け萬不都合の事無之樣可仕御放念可被下候
兼て内々言上仕候婚禮の事も蜂氏の盡力を得彌來る四月下旬に仕り候心
得に御座候尤も此事は公使館ゟも申出候處程能承諾致し吳實に安心仕候
過日願上候弟の生徒御免の事は最早近日生徒一同御呼返しの令出候に付
公使館の内沙汰にて別段生徒御免の願書不差出方反て宜敷と申事に付先
其方に相極め申候此段言上仕置候何分乍此上萬々野老一身上ゟ儀に付て
は即今ゟ處は蜂氏の深切に任せ申居候然し乍ら萬端宜敷御取立被下候樣
奉伏願候

小室古澤抔も時々御逢可被爲遊と奉存候同人共も議院建立の事建白致し
候趣是は野老抔も兼て同論に御座候能々御詮議被爲遊何とかして形ちの
本體を御取立被遊候樣只管伏願仕候申上度如山難盡筆上尚后便奉得御意
候早々頓首謹言

三月十九日　　三宮義胤
拜

岩倉老公殿下

本文言上仕候通り即今は萬事蜂氏の厄介に相成申候覺悟に御座候得共
此末宜御機會も被爲在候はゝ當地歐洲の間にて相應の御用を御申付け
被爲下候樣只管歎願仕候呼嗚鐵面皮々々々哉

九　松平慶永書翰「岩倉具視宛」　明治七年三月廿五日

謹ゐ奉捧一翰候時下不均ニ候先以御安康奉賀候扨は先日拜趨ニ節言上仕置候

御上御寫眞發買御禁止相成候樣仕度左なく候ては終に

御國體にも關係可致哉と甚以恐入申候偏に御勘考奉願候大久保卿歸京ニ後は速に被列華族候樣仕度人心興起にも相成且は第一

御上ニ御爲と奉存候

○島津信之助へは御內

勅答被爲在候哉久光卿彌被召候事に相成候哉相伺度奉存候東京日々新聞第六百四十二號三月廿四日ニ新聞展閲仕候處海外新聞中に記載せしサンフランシスコバルテイン新聞實に米國人の所憂よりしてかく認候ものと奉存候乍恐

皇國ニ御一大事不過して奉恐入候是迄も右樣ニ風說は承候へ共信僞難辨疑惑罷在候處米國人已に此事を發言仕候へはロシヤイングリスの兩國にて

皇國を窺ひ候に相違なくと奉存候依之此邊は政府におゐて御熟評聢と御目的被爲在厚く御注意被爲在度ものと乍不及奉懇願候過日來瘧相煩罷在拜趨言上難仕候故以野楮奉申上候誠に平臥ニ亂筆御海涵奉願上候也頓首拜

三月廿五日　　慶永

右大臣殿

一〇　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年三月廿六日

拜見候御細示忝候別紙則一見令返上候此上共御注意可被下候松下の事明日明後日の中伊地知出會の心得に候由利に於て箇樣の企有之候事頗る不審の事に候乍去殊更御注意被下度存候御請迄如斯候也

三　廿六

佐々木殿　　具視

一一　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治七年三月廿八日

自其表御差返し酒田縣貫屬士族栗田元輔則三月廿二日到着拙宅ゟ出頭
御用書類二封正院内務三條小生兩名書狀外に小生當て一封二通大入各從同人慥
に落掌披見且現場之景況直に承り始終御苦心之程は千萬令遠察候得共
先以大に安心則被安
宸襟政府一同にも欣然恐悦此事に候
一賊魁江藤始め遁逃御配慮之次第云々來示御尤至極に存候併し追々之御
報知にて島始め鹿兒島縣より護送相成嘸御安心と存候此度高島便御書
中江藤も足跡相附き云々同人よりも其次第承知定めゟ今程は捕縛相成
候事と推察致候全く貴卿盡力無手落御指揮之所致と殊更に感佩致候
一高島侍從爲御慰勞被差遣候に付御丁寧御禮狀之趣夫々及
言上候實に此度將官之盡力不一方之趣右故全く速に功を奏し候事と存
候
一征討總督宮三月九日福岡御着并宮御手元參謀之中より一人鹿兒島縣ゟ
迅速御差出し云々何も承候
一其縣下景況始めは無人境に入りたる次第之處早速續々として歸來市街
各自本業に就き申居段人民之幸福無此上事と存候農商に於ゟは縱令賊
に使役せらるゝ者と雖も一切罪を不問旨御布告之段實に御上策と存候
潛伏之者云々罪に罪を重ね候次第御歎息之趣殊に此後御處置上に關し
一入御心配と御推察申候
一兵火に係り候庶民救助筋云々巨細來示御尤に存候素り不容易非常之義
至仁之

叡慮貫徹候樣御處分祈る所に候

一銃器追々相納め以下云々何も承知致候

一九州諸縣之情實一時は危殆云々來示之外太田黒上京幷米田歸府其外よりも承候處貴卿御出張今三四日延引候はゝ九州一圓如何之形勢に立至り候も計り難かりし趣追々承知更に驚歎乍去

皇運所令然か既に已に貴卿最初頻りに奮發被急候所詮有之天下之幸福何事か不如之と恐悦至極に存候

右荒々一筆宛及御答候同時御別啓幷昨日從高島落掌御書中御返事は別段書附差出候也

三月廿八日　具視

内務卿大久保利通殿

是迄息代筆御斷申入候也

一二　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治七年三月廿八日

別啓御示之旨一々令承知候小生病氣御尋忝存候まだ十分ならず候得とも追々快方御安心可給候

扨かねゝも申入置候通り押ゝも一應出仕の上辭表可差出心得に候所何分戰鬪意外之形勢に到り宮にも爲征討御進發之次第非常之世態に付其儘出仕御用節々參仕罷在候何れ貴卿御歸府之上進退決し候事に候

一在百官何れも無異勉勵候間御安心可給候府下も追々靜謐世上虛說も次第に消滅致し益無由斷取締りも相附申候御放慮可給候

一板本魯國公使も奉命先日出帆渡航相成申候此便吉井少輔段々之申立にゝ洋行致候併大山士速に歸國之事十分周旋之趣に候尚面上子細可申入候

一朝鮮行宗家始の事も追々取調出來に付今度臺灣行人々東京發途次第引

續き相運ひ候示談に候

一臺灣事件に付谷干城進退上之事懇々御來示則東郷にも欠々々承り候次段第旁着次第迅速可相運存候所今以谷着府無之頗不審也尚又高島に承り候へは當月八日頃熊本發途の筈との事一圓合點不參乍去今明日にも着次第取計心得候外之用意は何時にゐも宜敷樣十分調置候旨大隈請合せ海路風波都合有之是非四月二日三日迄に東京發途長崎ゟ渡航無之ゐは當年の事に不運旨に候

一西郷大輔より内密段々申出之筋有之是非同人臺灣行可被命候樣條公小子等ゟ切迫内願に候彌云々申立の通りに候へは至極可然存候に付黑田ゟ及内談候同人よほと勘辨度々入來熟考之上同人申立の通り可到か十分見込も無之候へ共取極候ゐ可然申出候又西郷ゟ木戸にも相談之所同人にも黑多へ示談にゐ可然申候はゝ心配可致相答候由に候然るに陸軍省跡の所西郷には津多代理可然と申居候黑田には伊地知可然と申居候明日可及内評筈に候かねて伊地知の所御内談も候故小生には黑田同意に候尤何迚も當分大輔の方可然黑多申居候如何御評議爲成候哉箇樣事共御留主中實に心配致候

西郷彌被命候砌は同人總督谷參謀との申込に候此事黑田ゟ巨細被申入候筈に候得共一筆申入候

一來示の條々三條へも傳聲致置候黑多も相招き御來狀二通一見爲致申候

右來狀二通御請迄如此候也

三　廿八日　　具　視

大　久　保　殿

一三　三條實美書翰〔岩倉具視宛〕明治七年三月廿八日

同列會議に付德大寺始入來別紙草案出來候間入御覽候猶御熟考奉願候扨

谷干城にも到着相成候得は臺灣ゟ事必らす時機を不失樣發艦可有之就ゟ
は陸軍省ゟ處は愚存には先當分津田を大輔にゟ代理に被命徐に後來ゟ處
は大久保も歸東ゟ上御評議相成候ゟも目下混雜ゟ事は有之間敷なましい
に伊地知にゟも被任候ては又同人ゟ見識にゟ事を改め候樣にゟは却ゟ紛
紜を生し候事と存候尤西鄕臺灣ゟ事は妙策と存候同僚中にも異議は有之
間敷仍右愚存申上置候草々拜具

三月二十八日　實美

岩倉殿

一四　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年三月廿八日

陸軍省ゟ事木戸に談候猶明朝御談可申候扨久光大臣ゟ事木戸には大久保
に御謀りゟ上可然申候依ては大久保承知ゟ返事を得候はゝ木戸にも異議
は有之間敷萬一他日跡にて大久保に異見有之ては不可然何卒大久保ゟ返
事を久光上京迄に到來ゟ御手段は無之候哉御勘考奉願度候先右迄早々拜
啓候也

三月廿八日　實美

巖公

一五　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年三月廿八日

御書中の趣何も承り候高松阿州等の旨何も承り候少々勘辨仕置候事に候
海邊の事尙勘辨可致候
松下の事伊地知へは懸違未た面談不致今日參朝の便り可申入と存候當月
中と申事所詮難被行成否不可相分候間分り次第早々可申入と存候
巡察一紙可返上旨承候段々取調候得共卽今見當り不申候乍如何跡より可

返上候

右早々如此候來人中御使爲待候事に候以上

三　廿八　　具視

佐々木高行様

建白巡察書取一紙見出し候間則令返入候也

一六　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年三月三十日

益御壯榮恐悦に存候然ば松下綱武事件に付過日來伊地知へ面會致度存居候へど同氏病氣の趣一昨日も小子參　朝致候へ共不參昨日も同樣右故未だ示談相整不申候尤今日も參　朝致候に付若面會出來候はゞ重疊此事に候就ては松下滯京致居候樣御申越被下度候早々要用のみ申入度如此候也

三月三十日　　具視

佐々木殿

一七　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年三月三十日

一今朝尙又伊地知氏出仕否の處尋合候處過日來齒痛の趣にて食事も出來兼ね大に困苦罷在候旨迚も今兩三日の處出仕無覺束旨に候依之松下義松岡議官へ相談可致候間此段御心得迄に申入置候也

三月三十日　　具視

佐々木高行殿

一八　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年三月三十日

一別紙相認居候處只今松下入來明日發足可致申含め置候此段御心得迄に

申入候也

三　卅

佐々木殿

具　視

一九　三條實美・岩倉具視書翰「大山巖宛」　明治七年三月

（前文缺）
然は昨年十月政府議論二途に分れ爾後彼是云々之情實略御傳承且今般吉井渡航同人〻萬端篤と可申入候得共誠に意外之事にゝ鹿兒島人も自然兩端に相成候勢遺憾此事に存候就ゝは足下折角素志徹底殊更に勉勵之趣に付ゝは近頃氣毒千萬に存候得共前條之次第每事殘念之義而已に付速に歸國此間宜く周旋有之度に付是非此書狀着次第發途之事偏に渴望致候勿論洋學志願之義に於ゝは右一件一と通り落着之上更に留學之義は兩人にゝ引受取計候間兼ゝ此段内々及依賴候匆々如此候也

三月

實　美

具　視

大山彌介殿

追ゝ吉井より巨細承知之上は可相分候得共何そ舊縣之事而已に無之爲天下候條此邊篤く御注意是非とも内諭之處御承引有之度候

二〇　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年四月一日

過日來每々書狀辱存候昨日松岡及示談候處何分同藩之事左院中云々の次第も有之候間副議長へ申聞吳候樣との事に候尤も副議長より示談候はゞ松岡にも必心配可致との事に候然るに伊地知出仕來月三日四日頃ならでは六ヶ敷旨同人申居候左候へは松下發途の時日に可至に付近頃殘心に存候小生には民情の事深く注意有之候事故内務省可然存候得と

も大久保留主中少々都合惡敷に付貴卿土方中村邊御内談にて正院中文學上に關し候所へ御登用如何と存候松岡にも或は右邊と申居候尤御異存なく候はゞ小生より土方へ可申聞候得共何分余日無之今日は休日旁前條申入候條御勘辨可被下候

江藤も終に高知縣へ遁去の赴如何御考にや小生には板垣には毛頭懸念無之候得共其以下の中必死となり保護致し候者なしとも難申が亦畑郡人に萬一被計候事もなくやと苦慮候昨日伊達宗城卿咄しに過日細川すみの助と名乘七名計の從者にて宇和島へ來り士族煽動の由其人體則富永（ゆうりん）長脫人の旨正に申越との事に候彼是落合如何と存候御見込によりては速に御手廻し無之ては不相成と存候御舊縣の事には貴所は勿論河原塚にも百方盡力故決て卒然の事は有之間敷存候得共佐賀變動事件江藤一人捕縛さへ相成候はゞ首尾を取候譯に付決て小事に無之十分御注意にて木戸氏へも御計り可給候此段一筆申入候早々以上

四月一日

佐々木殿　　具視

二一　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月八日

今朝來御示之件々逐一拜承候木戸不參候事は小生も甚不審に存候苦慮仕伊藤へ申談置候猶今日は從小生別段に明日方出仕之事申遣候積りに御座候

臺灣事件御布告之事は別紙草案之通相認させ申候御内覽願度明朝拜上御否可伺候

一別封秘書と相認候一袋御内見に入候

臺灣一件物議紛々有之候由困り入候事に候川村伊地知御内諭之趣安心仕候一昨日來松岡福岡等出頭議論も承り一應は御旨趣相達置申候昨日伊地

知來同人義は至極了解致居福岡等へ説諭之趣も至當之論と感服仕候
明朝は參上萬事御直談可仕候仍如此候也

四月八日　實美

先頃鳥取縣へ遣し候山部と申者歸府陳述之書取入御内覽候同人義在縣中不都合之次第有之哉に内藤方差出ケ條中に相見へ候得共不審に存候山部義は決して不都合之事は有之間敷と存申候自然は間違之説には無之哉と存候

岩倉殿

二二　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月九日

木戸不參之義は情實相分居候得共其儘相成候ゑは頗不都合且は同僚中にも不審を生し世間にも相響候節は大に關係仕候間御互之處にて打過居べき事とも不存就ゑは明朝御參に相成候はゝ御同席にゑ伊藤に命し木戸方に使に遣し候ては如何尚伊藤にも内實盡力は仕候得共不得止情實も有之候事と存候林半七にも能々御申聞説諭相成候はゝ可然御如才無之事に候得共氣付之儘申添候草々不具

四月九日　實美

岩倉殿

二三　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月九日

別紙黑田開拓次官上申書一通差上候間御入手有之度尤佐賀縣殘賊探索捕縛の儀に付使府縣へは相達置候條右寫併せて入高覽候也

四月九日　實美

岩倉右大臣殿

二四　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年四月十二日

今朝來翰忝一見縣地内報余程分明全く御熟慮にて大に合安心候則三通及送上候將又世上の光景兎角物議云々只今の向にても前途之目的無之云々又司法省の事云々御話しの筋も有之趣尚面上得と可申承小生も御同樣色々承候事に候得共今日の事都て段々の行懸りにて萬不得止次第に候此上は吳々在上大臣御互に至り物議百端ありと雖も迫るに不動賊徒速に鎭定すと雖も一時の勝を賴まず不可拔の精神を以て專ら牧民上に力を致し根軸確か賊力運歩候はゞ何事かならさらんと頻りに苦慮候得共兎角持病の爲め苦められ速に出仕も不出來遺憾の事に候尚面上緩々心事可申述御請迄如此候也

四月十二日

具視

佐々木樣

追て兎角御所勞此頃又々御引入之旨尚御保養專一に存候何分今日は御憤發百事御盡力可被成の時と存候早々以上

金子の事決て出入承り候に不及却て面倒に候也

二五　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治七年四月十二日

三月廿四日御書内務省より正に落手四月五日御書同八日開拓出張園田實德分正に落手當人にも現場之形行承り追々人心も居合今日にゐは前日分却ゐ賑ひ候程之由安心此事に候御申越件々夫々可及御答筈に候得共既に過去り候事柄も多分に付一々不及御答に候

一江藤始捕縛之爲百方盡力心志を勞せられ候事千萬合遙察候併御苦慮不啻終に縛に付候事爲天下令賀候彼是進退萬不可言次第幾はくの御心勞を

懸候事と吳々憤懣之事に候

一高島更に下向御傳申候御沙汰件々相迫り居令懸念候處格別不都合も無之旨今便御書狀令安心候西郷ゟ傳へ候書狀に宮歸東云々申入定ゑふしんと存候全く此方にゑ讀違候

一岩村權令高知行云々承り候江藤捕縛之上は如何相成候哉と存候附ゑは同人辭職貴卿御心附等承知候三浦之處昨今評議中に候可成早々評決替り人體可差下候乍去岩村も必死之御奉公仕候義理上より免職も如何に哉當人ゟ辭表を奉り候事と存候尚早便御申越重疊と存候

一新聞雜誌中賊徒に與みし云々不都合之次第御心附御尤に存候是も專ら御評議中に候

一朝鮮行之事は臺灣行出發後に可申入通候今日迄之形行大隈ゟ西卿を以委細申入候筈に候此兩事件に至ゑは内密物議も有之候得共大隈には貴卿と約定も有之候旁奉命斷然振はまり盡力有之大に力を得申候何れ可期面上候

一兵部省之處折角伊地知之處申入候得共此義も色々と相成終に津田奉命候先便申入候通り又西郷ゟ得と申入候筈也

一久光卿之事何も御承知之旨令安心候

一小生進退之事は萬事貴卿御歸府之上御談し可申含にて夫迄差扣へ申候間今日には何も不申入候

一前途之事内秘云々懇示之條々勿論大事不可言先更に御一新之心持ならては不相濟と存候宸斷之處勿論に候得共政府中種々困難相考候次第も有之兎角御歸東を期候外無之と存居候當月廿日前後には御歸府之旨屈指御待申候白川縣令之事も御歸京を期申候

四月十二日　具視

大久保殿

二六　柳原前光書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月十二日

御紙表拜披候昨夕は寛々拜晤殊賜盛饌奉感謝候其節御談示御座候政府機密之事件朝鮮事件に關係候故内密御示敎相成候得共必他言不仕樣尙又御敎訓萬々銘肝更に口外仕間敷御安心奉願候拜復頓首

四月十二日

副啓副島氏へ傳語之儀自然氣脉行違候ゆは不都合故凡ゆ咄し不致樣御下命承知仕候御尤之至元より至要之儀にも無之爲見合可申是又不勞御懸念

三白華族會館之儀は今夕德大寺東久世兩卿拙宅へ入來に付集合議速に清書致し可入尊覽候出省前亂筆御海恕岐望候也

柳原前光

岩倉老公侍史

二七　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年四月十三日

御所勞如何哉未だ御出仕不相成哉今朝海江田入來昨夜土州人着兎角云々有之不容易哉に段々内密申出候趣一人は同人方へ罷出一人は貴卿方へ罷出候旨に候如何の事やと懸念致候條御一筆御示可給候早々以上

四月十三日

具視

佐々木殿

一追て右上京人に出念候樣海江田申候に付旁先以其樣子承知致し度御一筆可被下候也

二八　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年四月十三日

御答書の赴令一見候明朝來臨の旨に候處海江田士條公へも罷出何分上京

人書に出會可致方可然との事にて明朝九時上京人始め三人拙宅へ入來條公小生同席可承約定致し候今日は小生參仕只今條公と談じ候所に候併是より申遣候事故今一應御尋申入候御所勞之事早朝も御困りと存候條如何可致哉先兩人にて三人の話可承哉否御一筆可給候也

四　十三

尙々御答書には大底の所相分り先々安心候早々以上

具　視

佐々木高行殿

再答

二九　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月十三日

要用至急申上候唯今大隈入來此節リセントル始乘組進發之開拓使持艦玄武丸借用之事に付間違出來不容易困難之次第に立至大隈にも大心配リセンドルも此度之御用御理申出候程之都合にゐ誠に不都合困難之事件有之是非明早天勝黑田次官兩人拙者共尊邸に集會御評議有之度申出候仍ゐ明朝八字尊館に各出頭仕候間此段御承知可給候就ゐは今日ゟ御約申候土人之處ゐ御理相成候樣仕度右は午後二字頃御申遣し願度候前段艦之一條實に難事臺灣之成敗此一事に有之心配此事に候子細は明朝大隈八字前參上可申上候仍此段至急申上候也

四月十三日

岩　公　　實　美

三〇　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月十三日

唯今御書中拜承候電報之趣意外速成事案外に御座候御察之通必らす物議は可有之併已に處刑相濟候上は極別御心配程之事は有之間敷と存候別紙相認居候處へ御來書卽屬貴介別紙差出候草々拜復

四月十三日

岩　公　　實　美

三一　黑田清隆書翰「三條實美・岩倉具視宛」　明治七年四月十三日

拜呈乍居紙表を以て恐懼之至に奉存候得共佐賀縣之賊魁江藤初都合拾名刑戮に被處候趣只今電報拜誦仕候右に付ては御國人民は勿論外國公使等いも其罪を被鳴右御所置之次第御布告相成候ては何樣可有御座哉舊參議等之刑戮等に被處候儀外國に對し頗る可耻之御事とは顧慮仕候得共此上は尙明に御布告相成候方可然哉と奉存候に付管見不被散言上仕候返す々々乍居卒爾不顧恐縮此旨早々謹白

四月十三日　　黑田清隆

三　條　公
岩　倉　公　閣下

再啓石井等之賊魁于今召捕へ不被來候に付尙精々細索いたし候樣府縣いは重ゐ御達相成度儀と奉存候此段も申上添置候頓首

三二　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月十五日

御安全奉賀候然は臺灣殖民一條實に不堪苦慮候尤御委任狀は御改に相成候得共實地之運は已に殖民之都合に相成候間都督之處分は必らす殖民之委に可相成相違無之と懸念仕候左候時は各國之關係も出來前途之面倒難困不可言と甚痛心仕候就ゐは明朝大隈參議之御同席にゐ懇談仕置候はゝ都督之心得も可有之存候如何可有之哉小生は此義不堪懸念御委任狀を當てには決して安心出來不申と存候苦心之餘猶申陳候仍如此候也

四月十五日

四十二

岩倉公　　實美

二伸明朝御差支無之ば出頭可仕御一筆御答拜承仕度尤朝にも限り不申候

三三　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治七年四月十五日

今度賊徒處刑之義宮ゟ御委任亦貴卿へは宮ゟ御伺云々と有之候に付ゟは素り分明之事に候得とも窃に條公と申合候義は今日鎮定之上は平常之順序を以ゟ死刑之如き御伺可相成哉亦候御委任之譯を以ゟ直に御所置可被成哉乍如何密に宮御見込承知致度存候事に候且は江藤に至ゟは元參議職にも御登用國之大臣たれば尋常にも無之彼是後日之議を慮り極密に一筆申入候條眞に御含迄に候間必漏洩無之樣存候處刑は尤其地可然存候事に候早々以上

四月十五日

三四　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年四月十五日

昨朝も御苦勞段々御苦心の次第御尤に存候實に以地方牧民の事に注意盡力せずんば不可有事と存候就ては兩三日中本山御同席懇々申承度存候事に候昨午後海江田誘引彼三人に出會色々承り候事に候何卒申入候通り木戸氏へ得と御申入置可給候十七八日には高知縣令の事示談心得に候仍早々如此候也

四　十五　　具視

佐々木殿内啓

追て昨日三人の話條公海江田も同席承り候事に候尚又木戸御示談相濟候はゞ今一應其旨御示し可給候又大木氏にも高知事情得と御申入可給

候大木は日々御出會と存候條大木にも貴下へ内談令云々の事可申承申置候間其御心得可被下候仍早々如此候也

三五　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月十八日

過刻御書中之趣拜承候米英公使之應接は但米ゟ雇の人船等は差當候趣外務卿辨解も相成候乍併支那政府との引合甚條理相立兼候次第に付先臺灣之出張を扣へ支那に談判之外有之間敷との見込唯今寺島大木勝伊藤等入來評議に候就ては明朝正九字正院に集會萬々遂評議候筈申合候間何卒同時御參給度候仍御答旁如此候也

四月十八日　實美

三六　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年四月十八日

來狀一見貴卿本山林兩氏等兩三日中御同席の事固より差支無之幸の仕合尚明日限可申入候扨島津久光卿昨日神戸着今十八日同所出帆來る廿日横濱着港の旨申來候任序御噂申入置候早々以上

四　十八　具視

佐々木高行殿

三七　松平慶永・伊達宗城書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月十八日

尊書奉拜見候先以御清安奉賀陳は唯今從島津一封御到來昨十七日久光卿神戸着今十八日出帆之電報有之多分二十日横濱着港之段御深切御教示深畏入候何れ後刻罷出萬緒可相伺候右拜答艸々如此に御座候

四月十八日　宗城

右大臣公閣下　　慶永

三八　大原重實書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月十八日

御書之旨敬承仕候右は米公使より書面差越候も昨夜申上候英公使より申立も同樣之儀にゐ其起りは今日之新聞に米公使之儀を散々に罵り有之候右は臺灣の清國屬地たる事は素より無論なるに何たる了見を以て其處分の爲日本ゐ船を貸し人を貸すや必す是より事を生し和清間の戰爭となるへし米國ワシントンの法に人の戰を助け或は中人に立事は禁制たるに公使は是を知らざる事はあるましきに抔云々必果は英國アラバマ同樣之事となるべしと云新聞を米公使初て一見し愕然と致し素より戰爭の爲に船を貸し人を貸す等の儀を米政府にて許容致譯は無之只普通の雇入と思ひ許容せしなるに測らさる新聞に付若愈戰爭の釋なれは船人とも貸候儀不相成候に付右事實承度旨の書翰差越候より彼是配慮の樣子に有之候勝伊藤も出省に候得共格別の考も無樣相見ゐ候ヒンカムへは戰爭はせぬとの返翰只今石橋認め居候前條彼是承合せ申上候素より大趣意は間違なく候得共委曲之儀は難分且外公使よりも云々是は別段只今申出候事は無之候得共過日來彼是申居候事に候右に付ては今更やめるも不外聞之上の不外聞只外國船を借らす本邦船計を以て處置する外なしとの下説も有之候誠困難との評判に候右御用閑に内々急き用認候定めし御分りかねと存候得共少しも早くと申上候御推覽奉冀候何れ後刻罷出萬可申上候也

四月十八日　　重實

右府公殿下

三九　海江田信義書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月十八日

條公御狀は返上仕候

御狀拜見仕候ニイドウセンゟ事は信義も存不申候安田云々承知仕候萬里小路殿へ被召付候段出立前島津へ申出候由何分とるにたらぬ人物御座候得共當人云々は山岡へ篤と申入置候今般歸京又々たいこもち可致候必す少しは邪魔も可仕事と被考申候然處夜前別紙參り候間今朝差上候積ゟ處へ御狀被下乍序此手紙差上候從二位も必來る廿日歸京何分安心仕候三條公へは別段不申上候何卒可然奉願上候御受迄如此御座候頓首

四月十八日　海江田信義

具視公閣下

四〇　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月十九日

昨夜申上候通に付今朝は必らす御參奉願度候臺灣に出張を引留候事に相成候はゝ黑田次官等にも御內問無之ゟは如何且大隈西鄕等にも必らす辭表ゟ外無之事に可至哉と苦慮此事に候猶萬々拜上御談可申早々頓首

四月十九日　實美

巖公

四一　佐々木高行書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月十九日

謹ゟ奉拜呈候陳者木戸參議義過日申上候通臺灣事件に付議論有之候處今朝密に內務省中ゟ洩聞候處遂に辭表と申す運に立至候趣夫れに付內務大少丞は大臣公初め參議中ゟも奔走して建言とか申出候趣夫ゟ高行迄も其邊申出候者有之さなきたに天下ゟ人心狐疑百端ゟ折節實に可憂事にゟ萬一木戸免官に相成候はゝ最早天下ゟ事も極御難澁と奉存候前體今般臺灣事件は外議も不少且大隈參議會計を以事務局へ掛候事共諸省中にも甚不

審相立候者も多々有之兼ゟ申上置候通同人邊は能々御注意被遊度と存候
處右樣偖灣事件之物議有之中に天下擧ゟ誹り之有之人を其筋へ掛り居り
候事共幾部歟　朝廷之御爲に不奉存共此頃に色々と承り込候事も有之苦
心萬々御座候高行如きは兼々申上候通不肖淺劣之身を以不計も
天恩に十分浴し候事に候得はいつ迄も盡力斃れて後止の四字を踏候心持
に御座候得共何分共
朝廷之御施行振に依ては進退忽ち否之場合に立至り申間敷哉と實に以寢
食不安候孰れ拜趣可申上心得に御座候得共今朝も客來出省刻に相成候間
先以不取敢今日之光景御參考之萬一に申上度先は右耳匆々頓首敬白

四月十九日　高行

岩公閣下

追ゟ御覽後御丙丁願上候也

四二　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月廿日

御所勞如何厚御保護奉專祈候扨久光御登用之義伊藤木戸之處宜御勘考願
度候他には決ゟ異議無之候仍此段内々申上候也

四月廿日　實美

巖公

今朝退出掛一寸參上可仕候無程大木出頭可致候

四三　伊達宗城書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月廿日

一昨夕御直話申上候密議如何御座候哉御書通にて不都合有之候得は明朝
島津へ參懸參上可致哉心得迄相伺度御密示奉希候也

四月廿日

岩公閣下　　伊達宗城

四四　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」明治七年四月廿日

昨夜は御苦勞色々申承り忝存候過日借用密書類令返入候尤條公一覽相成候事に候早々以上

四月廿日　　具視

佐々木殿

四五　三條實美書翰「岩倉具視宛」明治七年四月廿一日

彌御安全奉賀候然は過刻黑田次官入來御内願之趣密々承申候於僕は昨日申上候通至當公平之御處分無間然事と存候得は幾重にも貴君御承諾相成候樣仕度候乍去參議中之了見は如何可有之哉に付猶一同に尊君之御心事申入遂評議可申候間此段々申上置候尚久光卿義明日午後被召復命被聞召御慰勞相成候ゟ宜哉一應御相談仕候匆々頓首

四月廿一日　　實美

二伸木戸辭表之義深考慮之筋も有之候に付先拙者預置公然披露之義は暫相見合居近々何分之沙汰可致旨縷々今日書面遣し置候間此段申上置候

岩倉公

四六　島津珍彥書翰「岩倉具視宛」明治七年四月廿一日

尙々三條殿ゟも同斷御案內申置候付其段も被仰上置被下度候尤明朝以奈ら原猶巨細可申上候

先刻參殿之節從二位御屆參　内之儀御案内可申上候段　右大臣樣ゟ承知仕相伺候處明日午後三時頃參　内可仕候付其段可申上旨申付候間各樣迄御しらせを申上候付御披露被成下候樣御頼申上候以上

四月廿一日

岩倉家　　島津珍彦

御家令中樣

四七　三條實美書翰「岩倉具視宛」明治七年四月廿一日

別紙之通寺島ゟ文通候間御廻し申候也

四月廿一日

岩公　　實美

（別紙）

六七日前英公使書記サトウ之別當を巡査吏捕縛致し候一條に付右家外にて取押候といへとも前以報知無之ゆへ一應還へし呉れよと云ひ我よりは以來は兎も角も右捕縛に付前以報せんとも公法に違はすとの議論昨日迄も英公使と舌戰に及ひ彌返す事はならすと昨夜決答いたし置申候付最早外務の手懸絶へたるを以御許へ參るかも難計若參りたらは唯公法に依るのみ外務にあらされは難答と仰られ度小事なれとも彼は大騒に言ひたて丶各國公使に廻文出し同論を求衆力を以屈服せしめんとす此一事はとこまても押切りて無妨は昨夜スミッ等とも相談いたし置申候此段一言及御斷置候拜具

四月廿一日

宗則

太政大臣公

二白岩公等へ一寸御通置被下度候也

四八　德大寺實則書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月廿二日

二白兼ゐ御示相成候久光卿ゟ賜候金裝の短刀作出來致居候今日下賜候ゐ宜敷哉尙條公へ可伺定と奉存候事

御書拜誦今日午後三時久光卿參仕に付是迄の例に倣ひ酒肴被下之事取計可仕旨拜承候條公御同席閣下には御不參之旨拜承候

明日は東伏見宮內務卿復命候はゝ正院　臨幸可被　聞食之事拜承猶日限御治定之上御示奉願候且宮內務卿等　皇居ゟ參入酒肴被下候義是亦敬承候歸京之日は里亭へ交肴一折酒一樽つゝ下給り後日　御前ゟ被爲召洋食御陪侍被仰付候ゐは如何御座候哉猶御勘考可給候先は早々御請而已如之候也

四月廿二日　　實則

右大臣公

四九　黑田淸隆書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月廿二日

扨ては昨朝御沙汰之云々退て尙又熟考仕候處御情實は無御餘儀と存候得共何分にも御至當とは存不申無理に追從仕兼ね何く迄も御請の方に奉懇禱候下官罷り上り御直に言上の含候處昨夜ゟ所勞に付乍恐寸楮を以て申上置候以上

四月廿二日　　黑田拜

岩公閣下

五〇　岩倉具視書翰「三條實美宛」　明治七年四月廿三日

（上包ニ）明治七年四月廿三日左右大臣云々に付條公ゟ御差出し御書草稿入

昨今島津從二位御登用に付具視左大臣に轉任の儀懇々御內意の趣は拜承

致候得とも素り不存寄義に付速かに久光卿をして左府に御登用の段反復陳述候通りにして此上何樣御說諭有之候共決して御請之儀不相叶候間再應以書取愚意申述致候に付具視衷情御熟察之上今日大勢上に於る障碍を釀さゞる樣一向希望に勝ず候

主意

今日左軸轉進奉命難致主旨數年來之情實は御洞知の儀今更事新しく喋々に及はざる事故格別陳述せず右情實は姑く置き目前奉命難調は一月喰違之一事兇暴の擧とは乍申畢竟具視不德の致す所其名器を忝して　聖明を鰥すの罪誠に愧懼に勝ず因て上表　上裁を仰がんと欲す然して遷延今日に至り候儀は表狀副書中に揭載二品宮復命事竢るを待ち進止を取んと欲す右の情實略　閣下御承知の御事是れ他の事故なきも今日轉進之儀難調は三尺の童も尙熟知する所に候加之島津從二位昨歲　勅旨を以上京以來之情態より先日歸縣今又上京之事實も有之旁一日も此儘被差置候ゟは千萬不都合に付至急御登用可相成處今具視に强るに三尺の童も尙爲さゝる所の者を以具視をして之を爲さしめんと欲し彼此論辨時日を空ふし益不都合を重ね人の不平不信を招かん事今日　廟堂上の長策にあらざるに似たり且人に顯職を付授するは其人天下人心の歸向する所に從ふて爲べくして固より君主一己の獨斷に任ずべからざる者あり今假に久光と具視を以て較して之を云はんに久光は舊と大藩の主にして　國家に大功あり故に今日一華族たるも天下久光の進退に依て擧動をなすの勢あり具視に至ては祖先の餘庇に依り生れて縉紳の後に列すと雖駑鈍不才一も爲す所なくして今日の重任を汚す尙且安んせざる所あり且　王室中葉以降大權下移既に中古前の　王室にあらず縉紳も亦中古前の縉紳にあらず其名は何の大臣何の納言と云と雖其實權實力は一小藩主の名望も亦ある事なし是れ數百年來之情態にして今日具視の久光と相較せざる亦明かなり且具視にして退くも未以天下の人心を動かすに足ず久光の一進一退は悉く天下

の動靜に關す以此觀之其素望と功勳固より當に左軸に御登用當然の事に
ゐ又何の疑ふべきにあらんや然るを强ゐ具視を轉進せしめんと欲して空
しく時日を遷延し更に不都合を重ねん事尤も然るべからざる如し加之具
視一身上に於て決して奉命難調の事實あり閣下幸に深按熟慮以時勢と人
情を詳にし速かに上奏　宸斷を取り以奉行し上は國家の大計を誤らず下
は具視の微志も亦少しく伸る所あらしめん事を衷情迫切故に辭令煩瑣荒
述無次千萬推知を賜はん事を頓首再拜

四月二十三日　　具視

太政大臣三條公閣下

少々不快愚息代筆高免々々

（參考）島津久光書翰「三條實美宛」明治七年四月廿四日

華翰拜讀仕候然は右府殿辭表御廻し愕然披閲仕候不被及　御沙汰旨御尤
之御義と奉存候
右御答迄早々如此御座候

四月廿四日　　久光

三條殿

再伸先日之書面何分兩三日中御沙汰之處偏に御依賴申上候也

五一　三條實美書翰「岩倉具視宛」明治七年四月廿三日

過刻御書中左軸に御轉任之一條縷々御陳情之趣共拜承仕候必竟下拙之强
ゐ御難題を申候も衆議公論之所在至當之事と存候外無之候何分にも爲其
時日遷延候ゐは折角之　朝意も貫徹之妙機を誤り候ゐは遺憾に候間何卒
御勘辨被爲在度存候何卒明朝は參議中御招にゐ內閣之議論も御聞相成猶

亦御趣意をも被仰聞候樣仕度候大久保歸着も此天象一兩日も延引之程無計自然大久保之歸を待候事彼方に遷り候ゟは甚不可然と存候仍右内々申上度如此候也

四月廿三日　實美

岩公

五二　三條實美書翰「岩倉具視宛」明治七年四月廿四日

過刻御細書何も拜承候元より拙官にも速に宣下無之ゟは不相濟事と苦慮に堪不申候得共尊公遮ゟ御辭退にも相成候に付致方無之此上は叡慮次第と奉存候間明日相伺御決定可相願と存候今日大久保面會同氏へも成行申聞候同人にも猶可申上と申居候間明日同氏とも申談其上御治定可仕と存候自餘御示之件々御尤に奉存候夫々下知可仕候仍過刻御請申上候也

四月廿四日　實美復

二伸大隈電信返答未屆き不申候也

岩公

五三　黑田清隆書翰「岩倉具視宛」明治七年四月廿四日

一別紙新聞返獻仕候

一昨日午後ゟ之烈風甚た懸念に存し早速兵庫縣令宮一統御出艦云々を電信を以て問合度處昨日午時五字に兵庫電信不通と赤羽同局ゟ斷來又々今早天打方仕含に御座候　閣下御左右御承知も候はゝ拜承仕度此旨匆々拜答謹言

四月廿四日　黑田拜

岩公閣下

五四　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月廿五日

過刻御相談申置候島津の事大久保申候に御決定之上は可申上譯も無之候得共自分にも先達來之見込に付一應は申上度候間明後日御發之事に候はゝ明日可申上との事に付大久保明日見込承候はゝ明日中に呼出之都合仕り明後日宣下に取計可申存候此段申上候也

四月廿五日

實美

岩倉殿

五五　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月廿五日

御安全奉賀候然は尊臺御進退之儀　勅諭も被爲在候上は速御出勤被爲在候樣只管企望仕候抑今日之形勢上下注目物議恟々之際に付高官重職之者一日之擧動大に人心に關係し動もすれは疑案百出隙を伺ひ皷動せんとする景況に付御所勞にゐも御引入甚關係する所不少候間國家全面之處に御注意被遊少を忍ひ大を謀るの時と御憤勵吳々天下蒼生の爲に渴望仕候仍愚衷陳述仕度乍荒涼一書呈上仕候可然御諒察奉仰候拜具

四月廿五日

實美

岩倉殿

五六　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年四月廿五日

至急御面會被成度旨懇々令承知候本山にも素より面會之心得の處　宮大久保等復命彼是繁多意外失禮候附ては少々子細も有之候間先足大面上御內話申入度明廿六日夕四時頃か廿八日朝八時等の內來臨有之度此段申入

候早々如此候也

四月廿五日

具視

佐々木殿

五七　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月廿六日

唯今別紙暗號電信相達候間入御覽候厦門邊にアヅマ艦を差廻し候趣頗不審に相考候今非内史着之上は發艦之義相見合可居筈之處東艦を發し大坂丸を申越候段甚懸念仕候先御參考に申述候匆々頓首

四月廿六日夜

實美

岩公

五八　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月廿六日

御紙面拜承候昨日復命相濟申候格別之事も無之是迄奈良原ゟ承り居候通之事委細言上有之候今日御不參之事何も拜承候草々拜復

四月廿六日

實美

岩公

五九　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月廿七日

過刻大久保ゟ内談之趣定而老臺へも申上候半愚考仕候處至極可宜乍併廟議之目的支那之談判を遂け着手するに決定せすして全く擧否を御委任と申而は於政府如何可成哉も不知御任せと申而は各國に關係する事に付御委任に而出張するにも廟議は不決しては如何御勘考奉願候島津にも明日相談可然都合により大久保ゟも島津に直に申入候而可然歟先右草々申上

置候也

四月廿七日　實美

岩公

六〇　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月廿七日

島津左大臣御請に相成明日四字參集承知に御座候也

四月廿七日　實美

岩倉殿

六一　土方久元書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月廿八日

久光公只今拜命御請に相成候此段申上候也敬白

四月廿八日　久元

右府公閣下

六二　佐々木高行書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月廿八日

謹ゐ申上候陳者本月十四日高知發足にゐ齋藤彌久馬昨夕着京相成且又先達ゐ山口縣人島田助七事件に付三條公ゑ御内命にゐ高知縣へ差下置候者は今朝歸京に相成候ゐ凡そ之光景承り候處過日來申上候通彌六ケ敷趣に ゐ齋藤抔は實に以憂慮仕居候只今之儘にゐ一日々々御因循に相成候時は不容易場合に立至り候も難計趣に御座候孰れ齋藤ゑ悉敷御聞取被仰付度候尚又今日は正院へ罷出候上條公へも申上候心組に御座候得共御含迄申上置候也

○此度臺灣事件に付米公使異議申立候義根元英公使專ら腰押候趣其子細

は閣下英國御滯留中公使と別ゐ御懇意被成其節ゑ御咄合に歸朝ゑ上は外國人雜居も宗旨も御解禁ゑ令を出すべしとの事ゑ處御歸朝後は右樣ゑ御沙汰は勿論無之英公使御邸へ屢罷越候得共碌々御談判も無之御用に御托し或は御他行と唱へ御交際上頗る不都合と申事にて英公使滿腹不平相唱へ候折節に付今時臺灣事件を得たりと米公使邊へ突込候趣就ゐは早速本國へも傳信を以相報し今般日本ゑ處分不可然段各國公使同意にて申立候趣意と申遣候趣ゑ處一昨日頃本國ゟ電報に尤なり若日本政府各國公使の異見を用いず愈臺灣へ兵を向け候時は各國ゟ日本を討可と申來候趣頻に不平徒相唱へ人心大に相動き候趣風聞承申候是れは全く虛說と存候得共有樣申上候御參考ゑ處相願候先は右を匆々申上候孰れ拜趨ゑ節委細可申上候也頓首敬白

四月廿八日　　高行

岩公閣下

六三　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年四月廿八日

先時來狀件々何も承り候高知縣事情尙齋藤より可承候得共條公へも御申入の旨宜敷賴存候齋藤の上京は重疊令安心候扨臺灣件に付外國公使云々は御推察の通り虛說に候尙巨細面上可申入御請迄如此候也

四　廿八　　具視

佐々木殿

六四　大原重實書翰「岩倉具視宛」　明治七年四月廿九日

過刻米公使外務卿へ面晤を乞候譯は臺灣一件に付米船ニユヨルク幷に同國人出發差止ゑ義日本政府承諾ゑ旨被申越候中長崎ては議論治らす其儘

出帆に成との風聞去廿七日頃有も當省より之書翰は慥なれは甚懸念之旨申述卿方は左樣之事は無之筈定而誤聞なるへしと答候趣に側聞仕候尚對話書は寫し後刻可差上候其外朝鮮にて去月十四日日本漂民十五名斬首との事今日新聞出候事を尋候事に候右申上候也

右對話之義は大久保にも申遣候事に候也

四月廿九日　　重實

昨夜は恐悦且御祝饌の御席に陪し畏存候得共前文之義至急に老公に御申上願候若未御退官前に候はゝ拙官名前まゑより切取正院に御上願候匆々不宣

四月廿九日

岩倉公子　　重實

六五　華族會館創設に關する建言書「中御門經之宛」　明治七年四月

謹て明治四年の勅諭を案するに曰く華族は國民中貴重の地位に居り衆庶の矚目する處なれは其履行固より標準となり一層勤勉の力を致し率先して之を鼓舞せさるへけんやと茲に公等此聖意を奉體し今番首倡して會館を創立し同族協同以て學識を研窮せんと欲るの主意書を示され通閲之下感發に堪へす想に華族の勤勉して衆庶の標準となる此擧を以て先務とすへし實美等不肖を以て維新の運に遭遇し各自顯職を負荷し且家祖の餘烈に賴て同族に列すれは敢て力を盡して賛成せさらんや惟るに會館を創立する蓋し其經費少なからさるへし茲に別記の金額を資助し聊か同盟の意を表す冀くは嗣後會館の規模月に盛に同族の智識日に進み以て勅諭に副へて寵眷に對へん事を敬て白す

明治七年四月　日

式部寮七等出仕兼大掌典大伶人正三位　四辻公賀
　侍從從五位　北條氏恭
大掌典正三位　慈光寺有仲
　侍從從四位　西四辻公業
　侍從正四位　富小路敬直
　侍從從三位　高辻修長
　侍從正三位　堀川康隆
陸軍少佐從五位大河内正質
外務省六等出仕正四位大原重實
式部權助兼大掌典從三位橋本實梁
三等議官兼式部寮五等出仕從四位大給恒
外務大丞從四位宗重正
式部頭從三位坊城俊政
侍從長從三位東久世通禧
特命全權公使正四位柳原前光
宮內卿兼侍從長正二位德大寺實則
右大臣正二位岩倉具視
太政大臣從一位三條實美
從二位中御門閣下

（參考）伊藤博文書翰「三條實美宛」明治七年四月廿三日

華族會同規則書及ひ諸公之御考案書共木戸へ爲見置候處別段氣着も不申

出昨夕返却仕候に付展讀仕候處御考案中著しく會議之條欵は御削除之御主意と被相窺學問處或は博物書庫館之建設に類似し愚見とは甚符合不仕必竟會同之擧協議に出て國制に非すと雖も政府之默許と又之を誘導する之上意あれは將來に望む處立法上院之體に致らん事を期するなれは自今默許其端緒を御開き被成候方にては有之間希歟學問は平生之事にて會同無之ゟも祿を有し一家活計に憂なきは無論研究すへき事に可有之然るに此節會同を創立する之趣向は華族力を併せて皇室を翼戴し國家を維持せんとの目的なれは實際國政之如何を議し之を政府に建議し時ありては又御下問等も可有之樣被成候へは漸々其會同之功驗も可有之歟と奉存候

書庫を設け縱觀を許し講議を始め古史を評論する等は會同之本面目には有之間布と奉存候愚考之儘上陳仕候書類一應奉返上置候誠惶拜白

四月二十三日

三條公閣下　伊藤博文

六六　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年五月朔日

前略過日御内書類返上の筈の處今少し延引候間此段御斷申入候且久光卿も左府拜命殊に憤發勉勵爲天下御同慶候就ては一兩日中島津邸へ御出有之先日來高知縣模樣懇々御申被下候はゞ大に可然と存候最右に不拘自今は條公小生同樣時々御往來被下候はゞ重疊と存候此段極内々申入度如此候也

五月一日　具視

佐々木司法大輔殿

六七　佐々木高行書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月二日

昨夕は御書下賜難有奉拜誦候陳者久光公御拜命以來御憤發被爲在候御旨如　尊命爲國家恐悦此の事に御座候將縣情之義同公へ申上候樣被仰聞實以難有奉畏候然るに同公へは未た拜謁も不仕前體司法之御用筋にゐも順序を申上候時は司法卿へ迄申出候譯に候得は高行御直に　閣下　條公へ申上候義は非常之時と相心得居候得共　閣下　條公には久敷御懇命相蒙殊に昨夜之事件か御内命も有之旁職外之事を時々申上候事にゐ是れは全く變則にゐ正則に無之は申上候迄無御座候右樣之次第に付卒然同公へ拜謁奉願候義も如何敷候間此の後自然御用筋も御座候節御尋下も御座候はゝ其節無腹藏可申上候實は　閣下ゐ時々罷出候も畢竟縣情之義と申邊は兼ゐ司法卿にも相心得候事に御座候間嫌疑も憚り不申候得共餘り出て過候樣相聞へ候ゐも返て不可然と愚慮仕候間其邊不惡樣御含被仰付度孰れ拜趨之節萬縷可申上候得共先は御受迄匆々如此御座候也頓首敬白

五月二日　　高　行

岩　公　閣　下

追ゐ昨夕は齋藤土方本山林同行にゐ墨水へ舟行仕候留守にゐ早速御受不申上候段幾重にも御厚免願上候也

六八　岩倉具視書翰「三條實美宛」　明治七年五月八日

昨夕早々大隈か西郷へ申立通り船可廻之事電報御返事は未た不被遣候哉久光公には今日拜上御相談との事被申越候未だ御申付なくば御參迄御見合せ置可然と存候

萬事大久保歸來之上には候得共來る十一日郵便船にゐ柳原出帆之事恐らくは難調左候はゝ別段に支那迄航海船御仕立無之ゐは決ゐ不相濟と存候條北海丸か其外何船にゐも用意之事今日御評議有之度存候

將又前文船可相運申越候所を以ゐ考へ候得は大久保にも行掛り最初御下命之通り仕り遂候方に決意と被存扨々御困難目今言計りなき異議百端と存候深く御思慮有之度存候

右早々言上如此に候以上

五月八日　具　視

三　條　殿

今日例刻參仕仕候得ども十一時英人晝食事に相招き候に付早出之事かねゐ御斷申入置候以上

六九　大原重實書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月八日

今朝罷出御話之末柳原氏に行向種々談合仕就ゐは西郷氏に電信三ケ條被申上候處只今山口氏歸京にて出省被致候付早速崎陽之模樣承候處兼ゐ御話も有之候通り重き勅諚有之候を纔かの電信又は大臣之内書を以て可止譯は無之との論は固より也因て厦門に向け兵員先出發致させ都督を待合せ都督も續きて出發兼ゐ之手筈を盡し兩國の交際には聊か不差障樣との事は十分含有之趣且米國士官は米公使之書翰を受なから出帆之旨右も米公使よりは止れとの命令にてはなく止かよいと云樣の文言の趣に有之因て忝旨返書致し相發候由右は只今同氏より承候儘要々耳申上候同氏も是より條公に出候趣に付貴邸にも御召にて委曲御聞に相成候はゝ大に御安意之端とも存候に付心付候儘申上候就ゐは西郷氏にの電信は御不用と存候何れ參上萬可申上候得とも爲匆々申上候敬具

五月八日　重　實

本文之趣老公に可然仰上可賜候也

七〇　柳原前光書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月九日

昨日は御投翰拜誦候然は山口少輔歸來崎陽情實致傳承西鄉趣意大略分明に候然る上は如御說愚案申上候電報御發しに及ふ間敷候將本日閣下及條島二公御會同之儀昨夕左府公にも拜謁巨細申上御同議に候何卒此上可然被仰合度條公は御病臥哉に致承知候得共御出席相叶候得は重疊之至自然御差支へならは何分至急之儀閣下及右大臣殿耳にても御會同相願度御治定候得は御一報被下度此段爲念及再啓候御下命次第拜趨可仕候謹言

五月九日　　柳原前光

右大臣公

七一　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年五月十日

河原塚入來何時に御治定候哉心得も候間烏渡御尋申入候早々以上

五十　　佐々木殿　　具視

七二　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月十一日

御安全奉賀候勝より別紙之通申越候間入御覽候如何可仕哉と配慮罷在候猶明日勝にも面會之上兎角取計候外無之と存候扨過刻御內話有之候大隈進退之事は深く御注意有之度同人義も其罪は可有之候得共閣下御洋行以來同氏之盡力昨年大藏瓦解之際にも畢竟同氏之盡力にゐ維持も相付候事にゐ內實は尊公御洋行中は實に必至困難之事而已始終同氏之盡力も不少事にゐ唯今突然擯斥に逢面目を失ひ候樣に相成候ゐは無情之事且は將來朝家に盡力仕候者も如何と存候幾重にも功は功過は過にゐ過を以て功を不被爲捨樣希候事に候尊公御洋行中之事は獨り拙者之所知に御座候間決

て同氏を保護仕候私情無之候間厚御助力有之度同氏免職之節は程能忠告致し同人ゟ相願本人も得心にゟ退官仕候樣有之候はゝ兩全之所置も可有之未發事漏れ不平を懷かせ候樣にゟは甚不可然と存候同氏之功勞も沈沒追々非常の功ある者も果は罪人に陷り面目なきものに相成ゟは爲朝廷歎息仕候吳々篤く御熟慮奉仰候必らす未發に漏泄無之樣御注意を奉祈候草々頓首

五月十一日

岩　公　　實　美

七三　大木喬任書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月十二日

昨日尊書を辱ふし謹奉拜讀候抑臺灣一件に付否御廟議可被爲在御事と奉存候昨日御下け示しのヶ條書に小臣もし相心付き候義も有之候はゝ加筆可仕被仰示奉拜承候愚考仕候處臺灣御廟議之事に就ては右ヶ條書に相もれ候義有之間敷奉存候得は別段心付きと申す事も無之任尊命右ヶ條書は御返上申上候御掌落被遊度奉願候但少々朱書を加申候恐惶再拜

五月十二日

呈上

岩倉公閣下　　大木喬任

七四　柳原前光書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月十三日

御書拜誦候彌御清康欣慶之至然は昨夜は深更參堂得拜晤奉謝候其節入貴覽候見込書御經覽被成候に付今朝不及拜趨旨承知仕候何分にも此上之處清國にて談判極り至要に付及內啓候通り參議中にて全權大使御發し幷に其者へ正副御委任狀等別ゟ可然御參贊有之度一着相誤らは不可言の失敗に御座候次に西鄉都督を出發せしむると否とに有之何分にも參議より派

遣論は斷然御主張之方と存候尚拜顔可申上候得共急務に付今日之御廟議にも可致哉と存候間此段言上仕候參殿不致候に付亂書内啓候御覽後投火是祈敬白

五月十三日

右府公　　柳原全權公使

七五　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月十五日

大久保參　朝候はゝ柳原支那行之事相促し可申と存候就ては副島の事は突然列座中にて發言候ても如何と存候前以先大久保之所存從尊公御尋相成候はゝ如何と存候

十字

今日は木戸從三位　皇居に參上候間拙官義參内　仕相濟次第參廷仕候に付此段御含可給候也

五月十五日

岩倉公　　實美

七六　岩倉具視書翰「花房義質宛」　明治七年五月十五日

一明治七年三月八日於巴里府御認め書翰慥に落手令一見候

一聖上益御機嫌克被爲渡恐悦欣賀之至りに存候

一貴下愈御安寧渡航令慶賀候定めて此頃は魯國着と存候

一一月十四日夜喰違に於て不慮の傷害を蒙り候處早速御尋問深く忝く存候幸にして疵不深案外速に平癒昨今は日々出勤も相叶候位の事萬々御安念被下度候

一太政大臣閣下にも暫時之事にて御出動相成爲邦家可賀之至りに御座候

一榎本海軍中將兼一等全權公使魯國在留被　仰付候極めて此頃は御出會
之事と存候過日蘭公使出會承り候處樺太一條談判に付魯ゟ使節を日本
ゟ差立候趣き實否元より確報無之候得共若し左樣之事に相成候ゟは榎
本被差立候上之事如何懸念候然る所日本へ差立候魯國代理公使スツル
ーウヱー氏へ巴里府に於ゟ御面會之趣き未た今日に着港は無之候得共
當人性質云々御申越し心得に相成り忝く存候全く普通公使と令遙察候
一佐賀縣一條も定ゟ御心痛と令遙察候存外速に平定國家の大幸如此事に
御座候
一臺灣一件も段々行違ひ出來苦慮此事に候得共先つ格別之義に不立至樣
相運ひ候見込に御座候
一御用繁乍失敬愚息代筆申付候高免可給候
右早々的用而已及貴答候御承知之通り昨十月來物議不少候得共追々靜
謐の方に候乍去引續き種々の事共苦心此事に候

明治七年五月十五日　具視

花房義質殿

七七　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月十六日

前略
大木見込至極宜敷無間然存候扨柳原事懸念に付島津へ申入候處別紙之通
返簡有之甚心配仕候唯今同氏發途事遷延候ゟは極ゟ困却事に候御良考も
候はゝ御示被下度候猶柳原見込書如何と存候處張札仕置候拜上萬々可申
上候匆々頓首
五月十六日　實美

右府公

七八　原保太郎書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月十七日

上包

右大臣巖倉公閣下　乞親展　在英　原保拜

逐日陽和之候に相成候處其後は閣下御金瘡も被爲愈此節は依舊廟堂に御鞅掌被遊候旨拜戴之御書と旭公子の御書にて詳之　皇朝の爲遙に奉賀候陳者歳初以來肥前の鼠賊沸騰一時は余程の兇焰に有之候よし之處征討使等御指向にて巨魁迄御生虜相成候旨拜承仕候閣下は御病居中にて非常の御配神被爲在候御事と奉存候早速の御平定國家の幸福不過之候只恨らくは靖難の功朝廷に奏するや否直ちに臺灣征討の御策廟議御決定有之候趣定めて其間には强縣の暴兵の怒りを漏す所に御容し被遊候より或多少之御情實有之候はゝ勢無據處より其義に御決し被遊候事とも奉察候得共今日今見時廟堂何の愚にてか頻りに征韓論を擯斥して强て肥前に鼠賊を蜂起せしめ其瘡痍未愈るや否や再ひ兵を海外に曝し被遊候事實に閣下等昔日征韓の御高論に反し臣に於て更に其緣由を會得不得候然とも萬一其議滿國の人望に決して後此擧に到り候時は實に千載の一時とも可申上候得共臣は其議の只々廟堂のみに決せざるのみならず只二三當路の御方强暴の舊藩兵を制壓する方法に盡させられ候より暫く其難を御避け被遊候事と奉存候若此後臺灣に勝し後凱旋の驕兵再ひ制壓すべからざるに至り候ては何を以て御鎭撫被遊候はんかと甚奉婆慮候今を以て論し候時は昔日の廟堂にて斷然征韓を御排斥被遊候も其後兵を肥前と臺灣とに段々御曝し被遊候ては總て畫餅と化し可申と奉存候既に征討の兵を御指向け相成候に至りて臣の百言も固より蛇足に屬し可申と奉存候得共閣下御歸朝後の御議論は總て西洋御實存の餘りに出て頗る人心を感佩せしむるに足り候物有之候處豈測んや御施行に至り候ては總て御歸朝後早々の御高論に反し大に朝廷の淺深を測量する物等有之候ては實に已往の御施政如何と

不堪杞憂奉存候元より日本の如きは新興の國にて萬途數百年練熟せし歐洲强國の所爲の如きに至らさるは當然に御座候得共何卒廟堂の諸賢は侃然立朝至誠に一國の民位を進むるの目途は公黨民黨の差別は何れに出るも斷然として自信して不疑の御政事を民心に知らしめずんは迚も今日を御維持被爲在候も甚だ御案奉申上候左も無之候ては所謂朝令暮改政出於情實と申候樣にては何の日歟文明の國に相成候哉其のみならず其禍ひ或は蕭墻の間に起り候はんと奉察候畢竟政府諸賢の自信不疑の御精誠薄く有之れは實に政府の不幸のみならず三千萬有余の生靈何の咎か有之候て右樣薄氷の下に御役使被遊候事と奉存候前文或は臣の例の暴言と御激怒可被遊哉とも奉存候得共御寛恕奉願上候閣下三宮耕庵へ御下書の中に臣を何れかの公使館の屬官にでも御周旋願上候樣被仰下候得共右は實に無根の事にて臣に於ては未嘗て閣下へ右等の事願上候覺は毛頭無之候或は小室氏等朋友の苦情不忍見の信切よりして閣下に願吳候事も有之候哉と奉存候得共臣は未だ數年間勉學成業の後所謂報効の萬一を謀らんと誓ひ居候場合に付何卒萬一右の事高聽に達し居候得は御取消し偏に奉願上候且學費の處は朋友の庇蔭にて兎も角も相暮し候樣には相成候間萬御省慮奉願上候扨臣も來英以來は龍公子と極御近所に滯留仕候事故毎日御高論も伺ひ亦頻りに御討論仕居候事に御座候同公も爾來は頗る御進達にて定めて後來我國に御補益相成候事と樂み居候事に候閣下御負傷後は同公を御召還の御沙汰も被遊候趣臣は其節未だ在米中にて其報を承候哉直に書を飛して御歸朝御留め申上置其後來英拜謁之處公子も斷然御歸英に御決定被爲在候處にて公私にとり頗る拜賀の事に御座候御親子の御情實にては實に申上候も奉恐入候得共何分公子も一歩今日に御因循被遊候てはは御再行も多分の年月を費し或は御本意の御存分に御達し被遊候事も難からんと奉婆慮此度の御滯在に付て臣にも其一分の罪を被仰付候ても敢て辭せさる所とそんぢ候何卒御海寛奉專祈候三宮屬官云々の事は何卒臣より

長年にも有之且近頃西婦と婚し候事故御周旋の相成候事に有之候はゝ臣の事は御取消被遊候て同人を御吹舉被遊候はゝ至極の御事と奉存候且同人誠忠の寸志は丁卯以前ゟ閣下能く御承知被遊候事なれは敢て使命を外國に辱め候樣の事は無之且友人も有之候得は所謂其短なる處は相糺し可申と奉存候斯に菊池大麓なる者あり元文部省の生徒に有之候處今度召還の一人にて歸朝すへきは當然の處當人の學識に富める海外書生の恐るゝのみならず亦西洋人も殆と卷舌候事故其他一の國器と相成候物を中道にして廢棄するを忍びす當時蜂須賀氏の金を以て留學被致候同人の如きは日本政府にて御抱ひ無之候も洋人も隨分世話いたし候物有之候得共今日にして右の如き物を朝廷の手を離れ他に養はれて卒業せしめ候事は甚だ今日朝廷の爲に所惜に御座候何卒特命を以て留學被仰付候はゝ豈同人の幸のみならず大に他日本邦敎化の大緒を助け可申と奉存候速に御一考奉願上候兼て御承知被爲在因州沖探三舊縣主の扶助にて今日迄滯英勉學仕居候處池田氏（因州侯）の家扶等は總て俗吏加之池田氏の愚且吝嗇なる維新前後同人の彼主をして方嚮を定めしめし事を忘却し最早學費も送る事出來ぬと斷り來り候よし探三の進退今日に至り實に可憐事に御座候探三報效の心實に可感候得共何分致方無之候何卒閣下の御高諭を以て舊因公をして探三昔年の功勞に免し兩三年の學費を貸與へられ候樣には相成申間敷や必す後來は御間にも合ひ可申人物と皆々惜み居候事に御座候既に同人も斷然海外に學ひ候事故國のうけは惡く相成り河田左久馬抔とは大變不中と相成居候樣子に御座候何卒直ちに因公に御說諭被仰付候樣同志中ゟ歎願仕候宜敷奉願上候臣等考へ候ては因侯も今日にして沖の如き功勞の志を丸で御見捨相成候事は余り候にも面らの皮の厚き事と御下けしみ申上居候事に御座候患難の時一管依賴して大平に捨るは古來暗主の癖には御座候得共實に歎息の至に御座候此上は閣下の御一言を御煩し奉申上度願上奉り候右之件何卒御答被仰付度願上奉り候

植山樣及其外樣へ別段書狀不仕拜呈宜敷御一聲奉願上候時候不同折角御自愛奉專祈候

五月十七日

嚴老公閣下　　保　敬白

此回は別段旭公子へ御答申上兼候數日の後に相認差し出候間右何卒御傳へ奉祈上候頓首

七九　岩倉具視書翰「大久保利通宛」明治七年五月十八日

明日四時より來臨之旨承り候段々御談申度件有之候事に候扨今朝は柳原リセンドル出會之事にゐ都合之趣重疊存候將亦別紙過日内々入一覽候大木臺灣一件に付清國談判見込書の續きにて候小生は可然存候に付柳原ゐ廻し置候御一覽異論之廉有之候はゝ御示可給候明朝柳原ゐ其旨可申入存候事に候仍早々如此候也

五　十八　　具　視

大久保殿

尙々前後二冊共兩大臣には尤承知同意に候也

八〇　三條實美書翰「岩倉具視宛」明治七年五月十九日

佐賀縣平定に付ゐは軍功之將士賞典之義も余り延引相成候ゐは如何に存候内務卿に御面談之御序に御聞相成候ゐは如何哉同人は自分之身にも關し候事故酌酌可有之歟と存候心付之儘申上置候也

五月十九日　　實　美

岩倉殿

八一　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治七年五月二十日

來翰令披見候伊地知云々之事昨日御内話申入候通り之約定に候處何故相替候事哉兩公之旨趣頗る不審に存候尚是より於
皇居兩公同席候間來示之事は元より内分にて可申談存候
○寺島米公使談判書令進入候
○大隈着今朝來御示談船差出すに不及旨承候
早々以上
五　廿

大久保殿　　具視

八二　三宮義胤書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月二十日

拜答仕候三月上旬御認之御狀本月十日相達し難有奉拜讀候御金瘡追々御快氣被爲遊日々御出仕被爲遊候段拜承實に國家至幸無之上敬賀に不堪候吉井幸助着英致し昨日一寸面會仕り同人より途中にて御難事之情態委敷承り何れも御高運之事と共に御喜ひ仕候
本國肥前一族は實に存外之事江藤抔擧動實に驚愕に不堪次第昨日は廟堂の長官今日は賊の巨魁實に人情之斯變化する恃むに不足事と歎息仕候當方にても御息龍公子抔とも兼ゑ心痛致居候事は此度江藤の暴擧に付ゑは舊參議の中に若哉關係無き哉此事計掛念に不堪罷在候處吉井の口機にては此邊之事は紛々說も有之との事去とは歎息に不堪事に御座候内外紛擾御苦心の事は重々拜察奉候仰き願くは何卒深く御考被遊成可き丈け寛典の御所置被爲遊度事と奉存候元ゟ御探索を御止め被遊と申趣意にては無之御所置に付御手を御下し被遊候處は實に國家の大事に御座候ケ樣の事は千萬御承知被遊候義申迄も無御座候得共野老婆心の余り奉言上候

此度暴徒蜂起之前后に當り唯大久保參議の確乎たる定論憂國思君の振舞は今更肝心仕候同氏出陣中左右掛引の盡力實に國家の功臣に御座候同氏の擧動の中最も可稱は前には斷然朝鮮征伐の論を破却し后ち暴徒兵を擧るに當りては憤然自ら兵を引て彈丸雨注の間に卓立し終に賊兵を破定せり誠政府之人は皆な如是鐵石不拔の膽あり度ものと奉存候拜承仕り候得は又々臺灣御征伐と申新聞追々見受申候是は定て國内兵士の氣を御一變被爲遊度との御深意より相生し候事歟とも拜察仕候野老は甚以此一擧に、は歎息仕候元より朝鮮に比すれは僅かの小島必勝は元々申迄も無之金穀の費も亦朝鮮に兵を向けるに比せは其半にも有之間敷加之我國二十年の末亞細亞の中央に出て國力を主張する爲めには是非とも是等の小島を獲取し追々手足を綱張せねはならぬと云是は野老も兼々御滯英中申上候事も御座候事也然し今日本の國力一歩も外に手を出すべき時に非す如何と云に今本邦の地位を西洋各國に比すれは僅に一小兒の如し決して人と人との交りは難被行御承知の通り各國或は我國を侵し横濱港には自國の人民を保護するを名とし兵を播置し沖中には地方近く軍艦を備へ日本在滯の西洋人悉く日本法律を以て所置する事不能哀哉是等の權は他國人の手に在り或は近來非常法外の難題を申出し日本國中に於て自由に各國の法律を以て我國民を支配する抔幸ひ政府是を抗し玉へり實に日本の國辱是より大なるなし他國人の支配は他國人の手にあり加之兵隊は我國中に置れし以上は全く獨立國と唱へらるゝとも申譯一言も無御座故に乏しき大藏省より金を出し外國に手を出すよりは先第一に我國内の耻辱を雪き候樣被爲遊度是今日の急務と奉存候内外國の侵掠を拔き漸々富國物産の道も相應相調ひ金貨の力もかつ〳〵出來候上は日本全國のあらん限り何そ臺灣の一小島に非す腕力の及ぶ丈は我本邦の望み次第に可有之或は言朝鮮征伐を主張する元より憂國の至情に出つと尤の事と一應奉存候得共是は凡そ日本は何程の地位に處何程の力あると云事を不知血氣武者の論な

り抑も他國に兵を加るに種々の道あり然し是の論は最早此邊にて止めに仕り申候詰極何卒斷然野老の哀情を御採酌被爲下海外へ兵を出す抔と云様な血氣武者論は老公御一言の下に御破定被爲遊度奉歎願候野老ケ様なる御國難の間に當り自ら奔走して報國の一分に供せざるは何にも遺憾に不堪是に反して五年の后歸朝の上は必す一角御恩に報せずんばならぬと勉强仕居候

○當地も各別相變り候事無御座候此節は魯國帝王來り日々所々見物致し仕居候

○此度肥前の一揆に付英國に於て日本のロヲンの直段の不變は誠に幸なる事に御座候

○幸助より承り候得は兼て蜂須賀氏鐵道の建白の末日本中の華族も方向を變し盡力可相成との事誠に國家の仕合早々商社を組立候樣御取成偏に奉希上候野老も折角鐵道法則等取調居候最中に御座候

○龍公子大學校中に御勉强決ゑ御心配の筋は無御座候原保太郎も龍公の近邊に住居勉强致居候同人先日中痲疹の如き物出發し閉口致し居候得共此節は元の如く酒を呑み議論致し居候同人も近來は中々人物相變り以前の原にゑは無御座候折角向來可賴物と奉存候

○生徒も八九部迄は拜命歸朝西洋諸國も日本人の黑き顏減し申候申上度事心中如山迚も一二の西洋紙に盡し難く尙后便に託し言上奉り可申候恐々謹言

五月廿日　　自英國　三宮義胤

岩倉公殿下御直閲

二白

東伏見宮九州賊徒征伐に付總督被仰付候由難有全く御盡力少々御益に相立候事も御座候哉と奉存候

此度手島某と申人に託し龍公子ゟ旭公に御進ゑ金の襟留め一本御廻し
申候間此段乍恐御傳言被爲下度候
野老家内よりも宜敷言上仕候兼て御滯英中に兩度計拜謁仕り候事御座
候時候御伺申上候樣申出候

八三　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月廿二日

御安全奉賀候扨英公使小會ゑ義寺島へ相通し候處同人考には何分斷申入
候ゐは不可然との論に候何れ今日參朝ゑ上談合御取極可有之候扨大隈等
ゑ一件久光卿には餘程深く見込切迫ゑ由に承候御互ゟゑ返答のみ日々相
待居られ候由此儘因循候へは必らす疑惑大久保異議申唱候より遷延致候
樣嫌疑相生候ゐは不容易困難ゑ事に可至と實に焦思苦慮に御座候何とか
久光へ御互ゟ談合不致ゐは不都合に可至存候何卒厚御考慮奉仰候萬々拜
上可申陳候謹言

五月廿二日　實美

岩倉殿

八四　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月廿二日

今朝書面にて申上候事件頗至急ゑ事と存込候間是非御面談申度候今明ゑ
中御來駕にても弟參上候ゐも宜無御遠慮御示給度候

五月廿二日　實美

岩倉殿

八五　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月廿二日

過刻光臨御苦勞存候誠意外ゑ事にゐ實痛哭流涕ゑ外無之候御互ゑ進退は

今日に決し不申ゝは國家之御爲に不相成と存候小生は大に決心仕候事有之候後刻出頭致候間是非御面會願入候草々拜具

五月廿二日　實美

岩公

大久保黑田等へは厚御談有之度事と存候今四五日も遷延候はゝ大に切迫致方無之勢に可至と存候

八六　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治七年五月廿二日

海江田只今迄入來島公見込種々承はり候に付何れ面上可申入候得共大隈始め之事未た足下ゝ談し候事無之此後可談見申置候間其御心得可給候早々以上

五月廿二日　具視

大久保殿

八七　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月廿三日

御安全奉賀候然は大隈一件昨日大久保ゝ段々談有之候に付一兩日中可及返答申置候處昨日木戸並御高論も有之候に付小生も大久保ゝは如何相答候ゝ可然哉と配慮罷在申候何卒尊君ゝも大久保ゝ猶御談相成候はゝ小生にも甚安心仕候仍相願度乍略義書面を以て拜啓候也

五月廿三日　實美

巖公

八八　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月廿三日

久光卿意見書類御廻し申候御落手可給候實に切迫危急之形勢如燒眉に相考候何分にも大久保黑田等速に御談合御互に進退を決し候は此時と存候草々拜具

五月廿三日

岩　公　　實　美

八九　島津久光意見書「三條・岩倉宛」明治七年五月廿三日

禮服復舊　租稅復舊

雜稅新規の分免す

違式註違の中苛酷なるは除違式一本に五逆式ともあり不明

兵士復舊　陸軍を減し海軍を盛大にす

不急の土木を止む

皇居は此際造營あるへし尤西京の體による

右之件々大久保異議ある時は免職

若御採用なければ僕奉職も無益に付辭職願奉る

甲戌五月　　左大臣

太政大臣殿

右大臣殿

右條件の外にも有之候得共先卽今急にすへきものを申上候也

九〇　三條實美書翰「岩倉具視宛」明治七年五月廿三日

別紙差出置候御落手可給候扨今夕島津面談は必らす彼一件と想察仕候尊公如何御答相成候哉一體は御異論無之臺灣事件に付緩急之處御立論之思召に哉爲心得伺置候猶大久保之處如何之御談口相成候哉是又心得迄に伺

置度候匆々拜具

五月廿三日

岩　公　　實　美

九一　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月廿三日

唯今御答書之趣拜承候從命今晩は出頭不仕候明朝は何れ寺島出會に付參上之事に候間早めに尊邸へ可罷出候實に國家之安危は此時に迫り候事と存候久光卿不平にゐ辭表に相成候ゐも頓着無之積りなれはよろしく併夫にゐは必らす退奸之名義天下有志之者之服する所に付必らす暗殺とか政府に迫るとか必らす禍端を開き候事にも可至と相察し申候實に一日寸時も方向を決し不申ゐは御互に不可謂事にも可至と苦慮仕候於茲は小生は唯死生尊兄と共にするの決心也萬期拜上候謹言

五月廿三日

岩　公　　實　美

九二　島津久光書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月廿三日

華墨拜讀仕候然は今日午後二時御來臨被成度候間差支有無御尋致承知候何も差支無之候此段早々及御答候

五月廿三日

右府公閣下貴答　　久　光

九三　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月廿四日

御安全奉賀候然は久光卿へ尊公より昨今之中御返答可相成との趣右如何

御答に候哉拜承仕度候猶又大隈參議義一身上之事には內密に切迫之密議にも相成居候處本人は承知不致故歟盛に出勤仕居候是程之事に相成居候を本人承知無之事如何と存候何と歟御洩し相成候ゟは如何哉昨日も同人ゟ海陸軍興張之御評議有之度頻に申居候得共先承り置候事に候仍至密申上度如此候也

二伸　黑田次官へも御密談相成度と存候

五月廿四日　實美

岩倉殿

九四　島津久光書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月廿四日

愈御清安奉恐賀候然は昨日申述置候大隈之一條御所置相濟迄之間參朝差控罷在候に付條公へも宜敷御傳聲奉願候此旨愚意申上置候也

五月廿四日　久光

右府公閣下

九五　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治七年五月廿四日

先時來狀今朝久光公出會云々に付昨日書類廻し候事承候條公より御傳之筈に候但し久光ゟ御議論は實に無益と存候今夕又明朝是非出頭候間夫迄御見合有之度存候早々以上

五月廿四日　具視

大久保利通殿

九六　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治七年五月廿四日

先時申入候通り書類は條公より御廻し被申入候筈外に一冊是も昨年之事
にゟ今日にゟは無用と被申被差出候則御廻し申入候
○今朝早卒寫取差出候分外に條公書類此者ゟ申渡し度候
○只今も申入候通り久光御出會御議論之事吳々如何と懸念候間今夕明朝
之内小子出頭迄必御見合可給候
○亦別紙久光書狀も入御覽に置候早々以上

五　廿四　　具　視

利　通　大　人

九七　三條實美書翰「岩倉具視宛」明治七年五月廿五日

過刻御内話申候大久保出勤之事所詮不承知とは存候得共何卒御申諭しに
ては如何哉不參にては頗外見疑惑も相生し事務之滯にも相成候條御内命
有之度候尤今日兩人宛之書面公然之物には無之と存候間表面は引入候て
も病氣事と存候若も公然に相成候ては甚不都合に候間此段も御打合置奉
願度候匆々拜具

五月廿五日　　岩　公　　實　美

九八　岩倉具視書翰「島津久光宛」明治七年五月廿五日

一大隈以下進退は臺灣事件收局の上御處置有之度存候事
一目下大久保大隈進退御處置有之候はゝ内外物議相生可申其御覺悟可有
之儀と存候事
一御意見之箇條尤夫々大小輕重の別は可有之候得共容易に御着手は決ゟ
不可然と存候事

右小臣の意見如此候也

五月廿五日

具視

左府公閣下

九九　岩倉具視書翰「大久保利通宛」明治七年五月廿五日

今朝御面倒申入候久光公御出會之御都合如何哉と頗掛念候尚御約之通御内報御待申入候扨右御談しは如何可相成哉難計候得共所詮御調談之事は出來間敷推察致し候小生事貴卿とは從來死生共に致候萬御意見に從ひ候事乍ら彼是と種々遠慮候ゆも最早愚臣の力決て可及處に無之又重ね々々誤り候事旁斷然方向相定め進退仕候より外無之此段更に申入候尤御内報は御待可申候得共島公ゟ昨今中可及返答申置候事故前條申入候事に候早々以上

五月廿五日

具視

大久保利通卿

一〇〇　三條實美書翰「岩倉具視宛」明治七年五月廿六日

過刻來臨御内談之趣に付愚意陳述仕候通尊公御進退之義は決ゆ不可然事に候間久光卿へ申聞之義は是非御見合祈候尤大隈進退緩急御議論之處は御尊慮通御討論相成候て宜奉存候何分尊公御身上之事は御申聞無之方に仕度候爲念態々愚意申上度捧寸楮候也

五月廿六日

實美

岩公

一〇一　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月廿七日

今日島津公御逢相成候はゝ其邊尊下に拜面仕度義有之候間此段至急申上置候也

五月廿七日　實美

岩公

一〇二　岩倉具視書翰案「島津久光宛」　明治七年五月廿七日

○大隈進退以下諸事臺灣件結局の上御所置有之度事

○右被行難く候はゝ具視病氣免職願之事

○大久保大隈進退被仰付候はゝ必百官中云々可相生御覺悟之事

○御見込改革件々尤大小輕重の別は可有之候得共難被行廉々可有之容易に御着手決ゑ不可然候事

五月廿七日

一〇三　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月廿八日

過刻御内談申候大久保待命書之義於條理御互に請取居候ゑは不都合と存候間願くは御子息方大久保へ御遣しにゑ別紙御返却相成候はゝ可然歟と愚考仕候書面にて申遣候も不可然又他人之耳に入候ゑも不宜御子息方御出ならは可然と存候儘申上候猶御賢考願候

五月廿八日　實美

岩倉殿

一〇四　伊藤博文書翰「岩倉具視宛」　明治七年五月廿九日

尊簡奉拜讀候然は昨日御評議一條黑田大木前途甚懸念之趣至極尤之次第

と奉存候昨日條公ゟ歸路黑田來訪に付今日迄之成行きは委敷相話置申候
尙亦條公ゟ御伺之處德大寺は宮內卿に被据置度思食云々勿論　宸慮に於
て斯く御望被爲在候事なれは何卒依舊德大寺宮內卿に被据置度萬々奉希
望候他に華族之中にゟ御人撰と申候ゟも恐らくは同卿之右に出る篤實溫
良之君子は有之間布殊に多年　君側に陪從し宮中之事に於ては頗慣熟之
事にも有之旁他人御撰擧は不可然と奉存候工部卿云々之事は　聖慮次第
に御座候へ共此事務之難易得と被仰上適當之人物御拔擢有之候樣奉懇願
候乍恐　聖上に於て未た充分に諸省事務之得失難易共御熟知不被爲遊ゟ
今日之際御憂慮之餘卒然御沙汰に相成候事歟と奉拜察候今日迄工部之事
務上擔任仕居候私ゟ其事務之管理難致と陳述仕候へは頗自誇り他人之技
倆を輕重仕候樣に相當り甚慚愧之至に奉存候へ共同省百般之事務悉く外
國人之關與せざる事無之隨ゟ文章往復等も多分原書を以する而已ならす
二百餘人之外國人約定又工業上或は外國品購入等之約定隨分手輕き事に
無之勿論博文淺學短識之悉く能く料理する事には無之候へ共幾分歟衆長
を用ゆる丈けの事は力の及ふ丈け相盡し候心底に御座候他省は事務雖多
端規則定例に據り多くは處分する事に御座候處工部而已は實際必竟損益
之事十の八九に居候次第にゟ細には御直に尙可申上候へ共大略右等御承
知には有之候へ共萬一御人撰等の御考案とも奉存候に付申上置候餘は明
日拜鳳に讓り匆々奉復

五月廿九日

巖公閣下　極密御內覽　博文

一〇五　三條實美書翰〔岩倉具視宛〕明治七年五月三十日

過刻御內談申候本人ゟ辭表之一條は久光卿ゟ發言之說にゟ於拙者は未同
意仕候議に無之候間此段御含にゟ大久保へも御談し可被下候仍此段爲念

申上候拜具

五月三十日

岩倉殿　　實美

一〇六　岩倉具視書翰「三條實美宛」明治七年五月卅日

只今大久保を引取申候御内話之旨尤申聞候事乍ら今朝來勝伊藤抔出頭段々示談も有之候趣殊に伊藤苦心且懇情之段深く感銘之由乍去到底迚も双立之事難出來亦久光退職にゐは大久保奉職の事は素より難出來此上は只々條公斷然御決之外無之旨伊藤へ及内談候由に候實になまじゐ之事にて空敷時日を被移候はゝ二つ乍ら被爲失候場合に至り候外無之吳々速に御決着よろしくと存候不取敢此段申入候早々以上

五月卅日　　具視

三條公

尚々愚考には尊公爲天下斷然御決心は實に恭悦に候乍去此機に投しかねて申上候(卽今と申には無之候得共必可然と存候)内閣議定とか元老院とか大に公議を被爲取候道相立候はゝ却ゐ舊新一和根軸被爲立にゐ可有之哉大木に厚く御談しにゐは如何と存候也

一〇七　大木喬任書翰「岩倉具視宛」明治七年五月三十一日

尊簡奉拜讀候久光公御辭表之外なしとの義誠に以て驚候大隈へは昨日も小臣を可申述心得に罷在候處條公をしはらく見合せをき候方可然との御沙汰に付さし捨罷在候處今日又々御沙汰には大隈へ申通可然と之事に御座候に付明日一應小臣同氏へは可申通と相心得罷在候處御座候

閣下を御召にゐ御諭被遊候ゐも可然候得共少々懸念仕候は御體裁如何と

奉存候小臣ゟ少々大隈へ相洩し候て必同人參
殿萬々可被奉伺其節十分御示し被遊候はゝ却而御都合ともにゝは無之や
と奉存候此結局は如何に勘考仕候ゝも大隈順然辭表仕られ諸事之まとま
りを同人ゟ被相付候はゝ身退き名全く却而美談不過之と氣之毒なから小
臣には相考申候明日には小臣にも必す大隈へ罷出候心得に御座候御閑隙
之折に一寸拜謁奉願度候間明日明後日之間に暫時拜趨可申上奉存候尚拜
謁之折萬々可申上先以御答爲可申上早々如此御座候再拜頓首

五月卅一日　大木喬任

岩倉右大臣殿下

執事御中

過刻
尊書賜り候折は外出中にゝ御答不申上失敬之段御海容被仰付度奉存候

一〇八　岩倉具視書翰「三條實美・島津久光宛」　明治七年五月

別紙之通辭疏差出候間宜敷御執奏願存候將過日生蕃事件に付對罪書差出
候處右事件未た底極無之に付佗日落着之上　上裁を仰がるべき旨を以左
大臣殿御預り置相成候處今未だ右事件到底之決無之して突然辭職奉願候
段如何に候へとも別紙上陳之義に付無據奉職難相調候間宜敷御取計らひ
被下度最生蕃事件兼て縷々陳述候通之義に付他日如何樣之難事を發候共
今日退職を以逃遁仕候義に無之其際に至り如何樣之御譴責も相蒙候心得
に罷在候前後事矛盾に屬し候故乍序一應申入置候再拜

七年五月　岩倉具視

太政大臣三條殿
左大臣島津殿

一〇九　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月一日

御安全御内諭之趣敬承仕候久光卿建議之一件は極而困難之事にて於下官當惑此事に御座候最早茲に到候ては條理所在に決し强迫之爲に條理を不曲樣致候外有之間敷と深苦慮罷在候大隈之處尊慮次第御説諭相成候ても小生之一決安危に關し又一身之進退にも係り御諒察奉願候於下官更に異論不申上候猶拜上萬々拜面可申陳候喰違處刑之事には左院にも議論も有之由内々藤井九成台承候事に候自然御高慮も候はゝ速に御示し被下度候

六月一日

岩　公　　實　美

一一〇　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月一日

過刻御書中御密諭趣敬承御忠告之處奉感銘候小生一身に取り職掌上誠に必至之場合偏御憐恕を奉仰候扨今日大隈も臺灣實地戰端を開き候上は海陸之準備一層御廟議を被爲盡候樣無之ては自分にも御理申上私にて彼地に參り度と申居候臺灣之事は尊公にも御擔當相成候得は右等之處は別ては御憤發出先不都合無之樣御勘考奉願候大隈にも御面會相成候はゝ可然と存候愚存申上置候草々不備

六月一日

岩　倉　公　　實　美

一一一　大木喬任書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月一日

尊簡之趣奉拜承候大隈へ可罷出心得に罷在候得共御枉駕被遊候御事に候得はさし控へ萬拜話之上大隈へは出頭可仕候御請まて匆々如此御座候百

拜頓首

六月一日

右大臣殿　　大木喬任

左右執事

一一二　大木喬任書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月一日

過刻は失敬申上幾重にも御寛恕被仰付度奉願候其後直に大隈へ罷出候處折惡敷他出中にゐ行向き相尋五代之宅と申す事に付今晩迄之内再ひ相尋可申家内へ申殘し又條公へ罷出今朝御含之御主意を體し申上置候處篤と御承知之樣に奉伺候左府公にもさまて御さし逼り之御樣子にゐも無之兎角速に大隈之一件に止り結局一着可致に付今晩にも小臣へ罷出都合よく可申通との御事に御座候右に付小臣も今晩にも明早朝にも必す面會可申通奉存候左候はゝ必す御殿へ同人にも御伺可被申上奉存候に付御含被遊度奉存候先其後之形行御含まてに申上置候爲早々如此御座候百拜頓首

六月一日　　大木喬任

奉呈

岩倉公殿下

執事

一一三　大木喬任書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月二日

倍御安靜被爲渡珍重之御義奉存候今日早朝ゟ大隈宅へ罷出候處幸在宿に付當今政府云々次第其なりゆき丈先以大略相はなし候處可驚は委細之事小臣ゟ反て一層詳に承知被罷在一件さし起り候節早已に承知罷在る由被申候就ゐは何者歟双方之樣子をさぐり眞實がをして兩端を持し候者多少

有之と相見申候可歎之次第と奉存候大隈氏之論に曰く左大臣公如此迂遠之事を被申立御維新以來七年之御事業を水泡に歸し候事の如し右等之如きを何そ御採用有之んやと信用罷在る也しかし西也東也

天子御　宸斷に可有之に付余等之知る所にあらすと

又被申に余一身之事も自ら　天子の御決斷によるへしと

右之口氣にゐ中々辭表等一寸にさし出し可被申樣子不相見候に付小臣にも輕易に右之談にも至り候ゐは不可然となし言ばを轉し一笑して談を終り申候大隈氏も隨分才子にゐ最早一件巨細に承知して猶不知ものゝ如く日々出勤も被致且如斯之口氣を見候得は隨分眷屬等を煽動して一議論を可起きの企てなきにしも不在と推察仕候就ゐは閣下にも輕易に御招き辭表等之御諭とも有之候ゐは如何之不平被申唱やも難計且又世間之論も相生し可申と奉存候に付篤と御注意被遊度奉存候

右之次第に付　閣下へ參上被致候樣之事も不申聞して罷歸候得は今日閣下へ御斷被申義は有之間敷奉存候

右樣之次第に付別に御明考不被遊ゐは相濟み申間敷此談話中に小臣大隈之心事を推し隨ゐ更に勘考も出來候得共筆頭に難盡拜謁を以可申上候彼是に付直に參　殿可申上と相心得候得共大隈を引取掛けに直に參上仕候ゐは形跡相顯れ不可然と奉存候に付わざと參上不仕直に正院へ出頭仕候依ゐ不取敢御含まて書狀を以て申上候御一覽之上は此書中は御火中奉願候御都合により參上可申述先は早々頓首百拜

六月二日　　大木參議

岩倉右大臣殿

御執事御中

太政大臣公右大臣公を大隈へ御一言之御うわさなきを同人少々は不平に被思候樣子も相見申候

一一四　小河一敏書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月二日

老公之尊慮を奉察候に大隈を今日被免候へは臺灣事件に付て免官と一統相唱可申候然候ては彼人壹人に其罪を荷はせて退官させられたるに當り此まゝ御在官は難被遊故老公も御退職被遊へきとの御見込哉に被伺申候

右に付得失之大權衡を以左に申上候

一左府公御引入に相成不申候はゝ夫迄之事に候へ共最早御引入に相成候事故既往は不可言候此儘日數を經候はゝ何方にか必不平を釀し可申候故是非とも一日も早く御出仕に相成候樣御處置之外無之候へ共左府公之御事故大隈殿御處置付不申ては決て御出仕は有間敷候依之過日も御直に申上候通大隈殿本官兼官を被免外務省へ一等出仕にて臺灣事件判理を被命候はゝ右事件之爲に免官に無之と申はどこ迄も明白に可有御座候此御運に相成候はゝ左府公も御出仕可有御座奉存候

一右之通にては大隈殿御受有之間敷よし也御受は有之候共出仕は有之間敷然候ては矢張老公も御在職被遊兼候との思召に可被爲在哉に候へ共外務省一等出仕之命下り候上大隈殿の出仕の有無は前以御推考被遊に不及事と奉存候もし御請無御座候はゝ夫迄之事にて夫は大隈殿一身上の事とのみ成申候夫共大隈殿出仕無之候ては御在職被遊兼候との仰にては愚老共ゟ奉見候ては大隈殿へ被對ての御義理立と申にこそ當り公明正大之尊慮とは難申甚敷申候へは大隈殿を保護被成候と奉推量ものも有ましくとは難申程に奉存候

一いかしても大隈殿免職に成候へは老公御在職は不被遊と御突張被遊候はゝ丞相公も大久保殿も御同樣之譯に成可申候然候へは只左府公一人に累卵之皇國をあて付て御擔はせられ候に御座候よしや〳〵左府公御引荷ひ被成候にも仕れ其通相成候て皇國の御爲よろしきと被思召上候哉此義は決て不可然事と奉存候

（付箋）もし丞相公は大久保殿も老公はしらす御一分は被思召候樣なゝ御似潔に被爲公平に見候へは全く私論に被爲陷候

ことゝ可申と奉存候

一臺灣之事件は乍恐御失策に可被爲在候御失策と思召あたられ候はゝ御在任にて其疵を聊にても被爲補候御處置こそ御相當緊要と奉存候御失策々出候事故半途なるに御退と申ては皇國に被對大不忠に當り申候

一此儘累日を經候へは左府公遂には御退に相成外無御座候左候へは皇國の變を釀し可申候又丞相公も老公も御退被遊候ては皇國の大難に相成申候然る處にては權衡を以て輕重をはかり大隈殿一人を被退候外無之候夫共頓には不被退前條之通御取扱相成候はゝ御義理は立可申候此旨をもつて老公々御發言にて御處置被爲在候に何事も被爲在間敷と奉存候

一此儘にては此臭氣日數重り候程世上に洩可申候左候はゝ大隈殿御一身上にも必御不爲と奉存候一日も早く御處分付候方御同人之爲にもよろしかるへく奉存候

右前條之件々得と御勘考にて御一己御顧不被遊皇國の御爲に御身心を被盡候御誠心を被爲貫候義只々奉仰願候是皇國の御爲を思候のみならす此一大事件は老公之御身上に大關係之事に候へは御厚恩に浴居候一敏決て默止すへきにあらすと逆鱗に觸るゝも不厭丹心を吐て言上仕候御採用も被下置候はゝ何之幸慶か不過之候誠恐誠惶頓首謹言

六月二日　　一敏

一一五　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月三日

今日退館後伊藤面會内談仕候處内田之事は見込無之今日久光面談之次第逐一申聞候處策術他に無之申居候仍而明朝は海江田を以て判然之決答を承り候含に有之候此段申上候也

六月三日　　實美

岩　公

一一六　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年六月三日

何も承候津多某云々の事承候兼て御心配有之候事故御登用相成候義と相考居候處也議論も正かなる人物も亦眞實と見請申候旁兩三日中貴卿と面談の上心配可致候自餘御示の件々何も承り候仍如此候也

六月三日

具　視

佐々木殿

一一七　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治七年六月四日

其後御所勞如何候哉近比不沙汰尚承度候扨島公申立件條公三木始め不一方配慮之趣には候得共今以落着無之既に漏洩百官方向を失し日々紛紜を生し候勢根軸如此次第にゐ時日を送り候ゐは如何樣の儀出來も難計洪大息之至に候元より何れにも判然候事第一之事に候得共是迄形行所謂先へも跡へも進退なきの次第條公苦心千萬推計り候事に候爰に至り候ゐは貴卿にも賢慮を廻され爲　朝廷爲億兆何とか御方略無之者か貴卿には勿論不得止情實にゐ被成方も無之責るの道も無之事に候得共今日之如き難事は無之と存候條今一應御意見申承り度今夕明朝之内可有出頭候條御差支否承り度存候仍ゐ早々如此候也

六月四日

具　視

大久保殿

柳原ゟの書狀有之候無程御廻し可申候乍去長崎ゟ之來狀格別之事も無之候也

一一八　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月六日

昨日之一件大久保確答今日中黒田ゟ承り候筈に付分り次第可申上候大久萬之處は大久保分り次第伊藤ゟ掛合候筈に候今朝高崎へは左之通文通仕候間御心得に申上候昨日内談之次第頃日來左府殿へ陳述候通相變り候義無之候云々

右早々申陳候也

六月六日

岩　公　　實　美

一一九　伊藤博文書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月六日

唯今別紙之通從條公御申越有之候に付明日は屹度決答可有之儀と奉存候一寸此段申上置候拜具

六月六日

岩倉右大臣殿　　伊藤博文

（別紙）

條公ゟ博文へ御内書之寫

一件島津へ行向面談致候處更に異議無之仍ゟ決答之處承り度再三相迫候處何分明日迄決答之處相待呉候樣反覆被申陳候間其分に罷歸申候併先つ承引之體に見請申候

一二〇　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月六日

副島願御回報別紙返上候今朝奈良原來先日久光卿ゟ被差廻候建言ヶ條取消に被致候間返却候樣申來候に付卽差返し申候間此段申上候夫にゟ大久保も出仕致候趣に有之候草々拜具

六月六日

岩　公　　實　美

一二一　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月六日

御内示之趣敬承仕候大隈へは伊藤ゟ談し不申明朝大久保返答黒田へ申入候筈に付其上伊藤ゟ大隈へ申入候筈に候小生にも大隈之處頗懸念仕候明朝伊藤に面會篤く可申談候久光卿建言ケ條之事は内實は伊藤抔も同論に〆小生にも可然と相考へ内々安田に申見候處同人ゟ久光に申入同論に相成候よし尤小生にも久光卿ゟ所望に無之候得は强〆は不申本人申立に候は丶被盡衆議候方一體之方向も相定り前途之目的も相立可申と相考申候猶拜上萬々可申陳不取敢過刻御答迄如此候也

六月六日

岩　倉　公　　實　美

一二二　岩倉具視書翰「高崎正風宛」　明治七年六月六日

昨日條公より内談有之候一件於小生もケ條之通り同意相變り候事無之候間此段一筆申入候也

六月六日

高崎正風殿　　具　視

一二三　伊藤博文書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月七日

唯今參殿仕候樣被仰越可罷出奉存候處條公ゟ罷出候樣尚亦御申遣に付參殿御用之趣早々相窺候處大隈と談判之都合被聞召度思召之趣拜承右は今

朝條公へ申上置御當人方御聞取も被爲在候由に付別に委敷可申上程之事も無之に付今日參殿は何卒御免可被仰付少々不氣分にて今朝來難澁罷在候

過日來之混雜は　閣下にも親敷御承知被爲在候儀にゐ何分目下に瓦解仕候處實に爲天下不容易大難を釀成其憂恐無處底止協和之策を立燒眉之急を救濟仕度奉存居力之及丈けは相盡し見候處最早少々疲れ申候間乍恐閣下にも此際一層御勉勵御救濟之御手段被爲盡度奉懇願候拜具謹言

六月七日

一二四　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月八日

御示之趣拜承候今朝は折角御内談之處不應尊意恐縮之至候乍憚今日に相成御辭表等に相成候事は御條理に於ても如何と爲國家不安奉存候幾重にも御止り强ゐ奉申上候事に候於小生は御取次申事決ゐ難仕と存候伊藤黑田等今朝相招候處掛違不得面會當惑仕候是非明日方島津大久保共出勤之樣申入候積りに有之候大隈辭表之事は其上御處分にゐ不苦事と存候先は匆々御酬迄如此候也

六月八日

岩倉公　　實美

一二五　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月九日

拜讀御憂慮御尤に存候今夕迄相待大久保返事無之候はゝ相尋可申と存候猶分り次第早速可申上候明朝諸省は十字と相觸有之候此段御報申上候也

六月九日

岩倉公　　實美

一二六　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月九日

過刻御書中拜承候大久保ゟ別紙書面到來御内見に入候猶拜上萬々可申陳候也

六月九日

岩　公　　實　美

一二七　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月十日

御紙面拜承候御遲刻に相成候ても是非御參給候樣奉願候内地旅行之事は餘程議論も有之且左府大久保等出勤無之中は決ゑ御決議不可然存候此義は猶厚御談不申ゑは不叶と存候大隈一條別紙之通大久保ゟ返書到來候間任幸便入御内覽候此義も拜上萬々御談可申候早々拜復如此候也

六月十日

岩　倉　殿　　實　美

書損高免可給候

一二八　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月十三日

御紙面拜承候於下官も今朝御談申候外無之候過刻大隈來候に付今朝御談申候通申聞候得共委細之趣意相示不申ゑは今朝之書面にゑは必らす押ゑ委細承度被申出に相違無之と存候久光談同人免職の趣意は大隈義世上段々物議も有之御爲不宜と申位の事相覺候併於愚亭會合之節同人勤中姦曲之所業有之免職と公然御示し相成候はゝ臺灣事件に紛れ無之との口上有之候樣相覺申候併是は申出し候ゑは不宜唯ばつと致候處にゑ申立之事を示し候外無之と存候久光卿へ申入候事は不可然と存候海江田は何も申居

不申付先今朝之處にゐ大隈に御示し相成可然存候草々拜答如此也

六月十三日　　實美

岩公

明三字愚亭集會に付明朝寺島計出會之事は相見合可申候

一二九　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年六月十四日

一昨日今朝來翰何も承候津田且相義に付ては無助才配慮罷在候明十五日云々御示に付今朝には否可申心得にて先方返事待居候譯り次第可申入候全體廿日頃迄見合せに相成候はゞ重疊と兼て申入置候事にて切迫には困候將又左府以下の事御配慮御尤此頃には落着可致候於小生義は必御配慮被下間敷候御請迄愚息代筆高免可給候早々以上

六月十四日　　具視

佐々木殿

一三〇　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治七年六月十四日

前略津田士の事早速より夫々心配仕置候處今日河野林等にも返事不得止次第不被行併兩月中に滯在相成候はゞ夫迄必ず心配屆き候見込は有之尚巨細は面上可申入候得共早速のため此段申入候早々以上

六月十四　　具視

佐々木殿

一三一　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治七年六月十五日

別紙條公島公には御同意候各位御意見承知致し度如此候已上

六月十五日

大久保殿
大隈殿
大木殿
寺島殿
伊藤殿
勝殿

具視

追而御一覽後御返し可給候也

外國交際之義は
皇上にも深く
聖意を被爲注候御義に御座候得は御同前にも其御趣意奉體可仕は勿論卽

今之要務と存候隨而相考候得は西洋各國に於ては何國にても諸大臣等は
毎々其國在留各國公使及其家眷所屬等を招待致し或は晩食之盛宴或は茶
讌夜談之小集其禮節之繁簡は御座候得共月次必す數度之催有之其節は其
主人は勿論其國の貴戚大臣又は有名之學士抔も相會し互に一室之中に周
旋候て懇親に接話候事是固友誼上のみにも無之自然交際上にも相涉り杯
酒談笑之間を以兩國之大事を相了候樣之義も不少哉に相見候具視使命を
列國に辱候節も數如此接待を受親く目擊も候義にて交際上不可欠義と存
候然るに我國にては諸公卿にも各國公使等とは公事之外接會之事も無之
夙夜鞅掌之際自然其暇なき筋無據とは乍申雙方之情意何となく浹洽不致
彼方より觀之候得は如何にも不懇親に覺可申哉と被存候間以來は外務卿
之義は職務相應之儀に付夕宴小集一回例月一次三大臣には各自夕宴小集
隔月一次各省開拓長官には順月一次位つゝと凡相定め其他花晨月夕納凉
賞雪等臨時郊外別墅等にて會遊之事抔都て（久光附箋に云ふ）花晨月夕云々右は西

洋各國ゟ通にゟは卽今ゟ形勢にゟは致し難き事も可有之歟と愚考仕候）其主人幷家眷は勿論各省長次官海陸軍將官或は非役と雖も華族亦有名士人等ゟ招に應し相會し或時は宮方にも御臨席相成候樣致候ては如何哉最一體ゟ調度銘々相辨候も不容易義に付右費用は都て公費に屬し別段ゟ御出方相成取扱方は一切外務省にて引受仕拂其都度器具其外給仕に至り銘々私邸ゟ爲持出候手筈に致候得は自然被行易く存候隨ては交際費として兼て支給相成候分は御渡しに不及哉と存候此段及御相談に候尤御同意の上は參議中示談外務省にて取調方可爲致存候以上

五月　　具視

太政大臣三條殿

○左大臣島津殿

安芳

宗則謹案

☞國公使饗應の事彼我親疎の差別なく其度數を定め難し彼遇せられん事を喜ふ所のものは第一二等の高官なり外務卿は日今カ日之モトノマヽ公話のみにて彼に於ては余り珍しからぬ事ならん近來事務の關係多きは大藏次に內務なり近頃の疎遠より起る不和を補はんとせは先平日沮滯せる事務を親ら公使館に赴き懇談し機嫌に應して其自家に招待すへし今般內地旅行の如きも公話のみならすして一兩名宛公使を招き食席にて懇話になる方我に利あり右の如く何にもせよ事務上より取付き招待の手懸りを引出すを好とす疎遠なる人より突然招待を言ひ入れては彼必辭するならん此機會は豫め幾次なるを定不得食器配膳等の如きは容易なれとも各自家の備なきを得す併大臣公を除くの外省々の關係多少あつて自家の用意なきを得す食費の外營繕の費少からさるへし

六月十五日

一三二　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月二十日

過日初に大隈ゟ差出候書面御寫被爲有候はゝ拜借仕度若不被爲有候はゝ何卒御取寄早々御廻し願度島津ゟ尋問之事有之入用候間此段相願候也

六月廿日

岩倉殿　實美

一三三　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月廿四日

御紙面拜承候今日横濱御出御苦勞奉存候島津之事大隈進退迄不參と存候辭表には至間敷存候何分昨夜大久保ゟ承知之通小生も職掌上一決之外無之存込候事に候谷樺山之事一向承不申尚今日參朝之上大久保に談し取計明日にても集會可仕候草々拜復

六月廿四日

岩倉公　實美

一三四　島津久光書翰「岩倉具視宛」　明治七年六月廿四日

近日は御起居拜承不仕候得共御安康御勤務可被成奉大賀候柳原より之來書御廻し披閲相濟致返上候序に申上候過日來大隈云々之事件紛紜と相成り彼ゟ書面差出し候に付附紙致條公に差出候間定て御覽之事と奉存候乍併貴意未委曲拜承不仕不安心之至に御座候何卒細詳御示諭被下度奉伏願候再拜

六月廿四日

岩倉殿閣下　久光

一三五　三條實美書翰「岩倉具視宛」明治七年六月廿五日

大隈一條も尊公御考被爲有由之處僕暴斷神速取計深恐縮之至に存候既に相行候上は致方も無之明後日よりは必らす出勤可有之と存候間左樣御承知奉願候將御內談有之候御內儀女房老輩被召候事至極肝要と存候實は先年舊弊改革も僕は老年可然人撰御取締役女無之ゐは如何と存候得共一時官女之權を削り
皇后後宮之權を被爲握候樣無之ゐは不可然と存候事にゐ唯今如き御體裁にゐは甚御案申候間吳々御配慮企望仕候草々用事而已如此候也

六月廿五日

岩倉殿　　實美

一三六　三條實美書翰「岩倉具視宛」明治七年六月廿八日

御安全奉賀候今朝來御內書之趣敬承候御不例之由御加養專祈候大隈一件尊公段々御配慮之趣遮ゐ取計甚恐縮候得共大久保伊藤にも憤勵努力之決心に相成候へは偏尊公にも御憤勵企望仕候事に候佐々木之事御配慮之趣御尤に存候其邊屹度注意可仕候何れ拜上萬々可申陳候尙又臺灣事件兵隊神速引揚之事御尤に御座候乍去大久保にも餘程深慮仕居候間同人とも別段御談相成候はゝ都合宜と存候臺灣一條は尊公にも別ゐ御主張之義に候得共篤く御注意申迄も無之事と存候先は今朝來之御答旁一筆拜啓仕候匆々謹復

六月廿八日

巖倉公　　實美

一三七　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」明治七年六月廿八日

津田士之事愚息より申入置候通り勝氏引請云々被申越候如何の事哉甚以不審に存候勝氏より何と被申候哉眼目の所承知致し度存候小生出仕候へは元より御面倒不申入候得共昨曉より少々腹痛の所夕方より兎角不工合全く時邪當りとの事にて兩三日出仕も無覺束前條御面倒申入候事に候早々以上

六月廿八日

佐々木殿　　具視

一三八　三條實美書翰

「岩倉具視宛」　明治七年六月卅日

今朝御談申置候島津一件は一兩日中大久保に緩々今日迄之手續申入候約束に仕候明日中には面會之積りに候扨臺灣御處分餘程御大事と大久保申居候法律リセントル御雇佛人等公法上取調飜譯出來に付明後日御評議有之度猶兩外國人へも質問有之候はゝ可然との事に候就ては明後日十字迄に御參朝相成度候此段前以申上候臺灣一件至極大事に有之候間御所勞御扶是非御參願入候仍此段申上候也

六月卅日　　實美

巖倉公

一三九　大隈重信書翰

「三條實美・岩倉具視宛」　明治七年六月

曩に島津左大臣公の建議あるや本月七日閣下重信に諭する所あり重信乃ち鄙見の概略を陳述し尋て病を以て辭職を請へり退て之れを友人に聞く其建議條欵中重信か職に在る破廉恥を以て物議を來たし因て重信か進退に及へりと重信憂惶措く能はす窃に思ふ　聖恩優渥重信か不肖を棄てす久しく三職に列せしむ重信日夜奮勵維新の業を賛成する所あらんを是れ

圖る而して自ら信す重信心事之れを天地神明に質して愧るなしと然るに重信果して罪過あらは何の顏ありて容隱して朝に立たん又安くんそ內外人民に對せん是れ聖明の累を爲すなり願くは閣下成憲に因て法吏に下たし審斷する所あらしめは重信湯鑊と雖とも之を甘んす事若し讒構に出て無根の說を主張し以て公の明を惑はし重信を罪過に誣ゆるものあらんか是れ亦法の敢て宥すへきに非す閣下重信か愚衷を察し速に明斷をなし其事實を詳にし是非曲直を公裁せられんを懇祈の至に勝えす誠恐謹白す

明治七年六月

三條太政大臣殿
岩倉右大臣殿　閣下

大隈重信

一四〇　大隈重信書翰「三條實美・岩倉具視宛」明治七年六月

重信前日一書を捧け衷情を懇祈す閣下諭示するに島津左大臣公之建議中重信か行事に涉るに非す公唯重信か職を免せんを內談せりと重信命を得て驚疑す疑て質さすんは大臣に接する道に非す請更に之を言はん夫閣下公と同しく中興の元老職海內の具瞻に在り其言行人心の向背之れに係り治亂の機之れに乘す重信不肖と雖とも員に內閣に備はる亦衆の屬望する所たり而して公苟焉として重信か免職に內談する所以のものは其職に稱はさるを以てか將た過誤失錯の糾正すへきあるか閣下和して之を然りとす抑高意の公と符するか然るに免職は參議に止る云々と其過誤失錯果して該職にあるか重信是か疑の解せさる所なり願くは閣下襟懷を披て明示し以て重信をして安する所あらしめよ然らされは重信皇帝陛下の明を汚し且つ閣下の知に負く恐懼の至に勝えす謹白

明治七年六月

大隈重信

三條太政大臣殿
岩倉右大臣殿　閣下

（條公御自筆附紙）
左府殿建議中足下行跡に付掲載の廉は無之唯免職之義を内談有之候迄に候事

一四一　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年七月二日

過刻御書面拝承候大山之事猶大久保より申出候筈に付夫迄相見合候事に候喰違一件は參議中評議は頃日來取調之通評決仕候左院へ相廻し居候ゑは余程隙取可申所詮此節之處刑は別格之事故左院へは不相廻事に申談候依右御答申上候也

七月二日

岩公　實美

一四二　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治七年七月五日

今日議事實に重大事件と存候此上は速に勅任已上文武官軍議臨御にゑ御下問相成候はゝ如何哉是迄之目的を相達候義に候はゝ可然無左は公論を以て變換無之ゑは唯一二之大臣の意見にゑ決論相成候ゑは頗不都合と存候猶御高慮明朝伺度候也

七月五日

巖倉殿　實美

一四三　大原重德書翰「岩倉具視宛」　明治七年七月五日

近來大御無沙汰恐縮仕候向暑之砌愈御平康御奉職恐悦千萬候然は臺灣一條世之風説承り兼々心配罷在早速可致出頭くだらぬ書取相認今日はと存

候得とも兎角さつはり不仕餘り遲成り候ても迹邊に可相成歟但最早御決定之後に候哉は不存候得とも愚存御國を存上候儘先　嚴君迄入御覽候宜願入候也

五月五日

重　德

右府公閣下

二白　前條之次第に候へは愚孫差出候也

猶又三白　島津一件は如何出勤に相成候哉御案し申上候儘奉伺候御模樣御沙汰奉願候也

一四四　大原重德建白書「岩倉具視宛」　明治七年七月五日

重德廟堂上の御儀差手ヶ間敷可申上筋は毛頭無之次第に候得共臺灣一件は國の大事傳聞儘難默止申上候其趣意は國民を害せし問罪復讐之邊にて可相濟歟兼ゑ大略は承知仕居候得共其後如何可被爲在と深心配罷在候處前條の筋にて可相濟とは誠に恐悅御國の御大幸申迄も無之と安心恐悅千萬に奉存候然る處或說に箇程迄に物を入れ人命をも損し候て問罪復讐と云計りの事にて相止め候ては實に何の益もなく無用の失費を掛け腰拔日本と云はれん事無念の至りならすや抔云說も出候歟是は何人の論說歟欲心と申者にて元來國を治むるには決て用ひさる事に候孟子に秦楚は富を以てし我は我か義を以てすと國を治むる大要は仁と義とを主とし欲は決して用ひさる事に候問罪復讐は其道理にて卽仁也義也至極至當の善道に候夫れに何そや欲心を發し箇程の事にて措とてはと申すは實以不道理の論說國に害する小人の心意義を主とせす只利を是れ視過を耻て非を飭ると申者也國を治むる賢人君子の趣意とは霄壤如何にも爾後國難を生すへくと存候能々御熟考御賢察被爲在偏に問罪復讐の邊にて御止めの方至極御妙策と奉存候間此邊にて御決定可被爲在奉懇禱候頓首百拜

明治七年七月五日

重　德

右大臣岩倉公閣下

一四五　三條實美書翰「岩倉具視宛」明治七年七月七日

二伸兎に角軍艦之二三艘は御差出し有之方聲援を張之一助にも相成可然存候

明日十二字迄に將官答議陸軍卿へ申遣候處何分午後ならては六ヶ敷由申出候扨一件決議實に難事と存候愚存には戰と一決相成候ゐは不容易紛議も可相起又速に退兵と相成候ゐも決ゐ治り相付申間布歟先唯今之儘にゐ蕃地處分濟速に可引揚御示しにゐは如何哉都督之申立を熟考仕候處未討蕃之處分も爾後防制之方法も結局相付不申樣に存候仍ゐ唯今之姿に差置候はゝ其内には柳原公使談判之都合も可相分存候決して支邦か蕃地に出軍戰を挑候事は無之事と信用仕候へは更に大兵を繰出すにも及間敷存候兎角一刀兩斷之處置は大變と存候猶明朝早參萬々御談申度候前段大略申置御參考に供し候早々拜具

七月七日

實　美

巖　公

一四六　奈良原繁書翰「岩倉具視宛」明治七年七月七日

時下無御障御忠勤被成御座奉拜慶候扨過日參殿右大臣公に左大臣殿御休暇中歸縣御暇願之儀御依賴申上候處兩日中御決答可被成下御沙汰承知仕置方今内外御多端之折柄御催促申上候儀別ゐ奉恐入候得共御殿之御繁務に引變へ弊邸左府殿は勿論家族一同當永日晝夜此儀に而已焦思罷在小生御使相勤候末之事にゐ寸刻も早御決答奉伺度八方被相迫困窮之餘り罷出